

Japanse vereniging voor de studie van

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

Vereinigung
für die
Belgische Studien

第8号

2023年11月

Association japonaise
d'études belges

ベルギー研究会 会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第8号

2023年11月



第4回「ベルギー学」シンポジウムの案内

趣 旨

日本・ベルギー修好通商航海条約締結 150 周年を機に発足した「ベルギー学」シンポジウム実行委員会は、2016 年以来、計 3 回にわたり国内外からベルギーに関わる様々な分野の研究者が集う国際シンポジウムを開催し、人的交流の促進、両国間の相互理解の深化をはかってきました。

第 4 回目の開催となる本会では、これまでの実績をふまえ、「音楽」を全体テーマとして取り上げます。ベルギーは 1830 年にオランダから国家独立を果たしましたが、その際、ブリュッセルのモネ劇場での歌劇上演が独立革命の一つの契機となったことを発端に、今日に至るまで、ベルギーにおいて音楽は産業、政治、文学、美術等、幅広い分野に影響を与えています。したがって、本シンポジウムは様々な分野の研究者とベルギーに関わりのある実演家の交流の場となることが期待されます。また、周辺のヨーロッパ諸国の影響を受け、複雑な言語事情や多層的な文化をもつベルギーにおいて、音楽という芸術文化がどのように発展してきたのかを日本で紹介する貴重な機会ともなることでしょう。



© AML (Archives et Musée de la Littérature)

2

開催要項

日時/会場	2023 年 12 月 15 日 (金) 駐日ベルギー王国大使館 (招待制) 12 月 16 日 (土) 上智大学四谷キャンパス 10 号講堂
主 催	第 4 回「ベルギー学」シンポジウム実行委員会、上智大学ヨーロッパ研究所
共 催	日本ベルギー学会、ベルギー研究会
協 力	駐日ベルギー王国大使館
後 援	ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁 (WBI)、日本・ベルギー協会、日本イザイ協会、国際交流基金
助 成	一般財団法人カワイサウンド技術・音楽振興財団
サイト	https://www.jb150sympo.org/

プログラム

2023 年 12 月 15 日 (金) オープニングイベント

記念講演



川野祐二 (エリザベト音楽大学学長)

オープニングコンサート

ウジェーヌ・オーギュスト・イザイ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第 5 番

加藤綾子 (ヴァイオリン)

諸井誠：歌曲集「子供の国」より 4.ぶらんこ 5.お使い 6.赤い風船

ジャン・アブシル：歌曲集「優雅な時間」より 1. 雷雨 2. 白い協会 3. 太陽

薬師寺典子 (歌)・守田絢子 (ピアノ)

一柳慧：ピアノ・メディア（1972）

飯野明日香（ピアノ）

アンリ・ヴェータン：言葉のない3つのロマンス 作品7 1 愛の歌 2. 失望 3. 思い出

甲斐摩耶（ヴァイオリン）・垣内敦（ピアノ）

2023年12月16日（土）

基調講演

作曲家、音楽史家としての F.-J. フェティス——オペラ=コミック《双子姉妹》、装置としての音楽史、そしてベルギー

友利修（国立音楽大学）

Eugène Ysaÿe Rediscovered

Marie CORNAZ (Royal Library of Belgium)

研究発表

J.-Th. ラドゥーの『古謡集』を巡るベルギーの国民／民族音楽

大迫知佳子（広島文化学園大学、ブリュッセル自由大学）

The Sounds of Euro Coins: Is Music Part of Belgium’s Public Image?

Alexis D’HAUTCOURT (Kansai Gaidai University)

フランドルのサウンドスケープ過去・現在・未来——カリヨンと共に

内野三菜子（ベルギー王立カリヨン学校「ジェフ・デニン」）

ワロン地方、及びフランドル地方におけるベルギーのヒップホップミュージック——そのシーンの特徴と相違点の考察

安彦良紀（ブリュッセル自由大学、大阪市立大学）

パネルディスカッション

F.-J. フェティスを読み、そして聴く——歴史・地理社会の点からもたらされる普遍への視野——

友利修（国立音楽大学）

安川智子（北里大学）

岩本和子（神戸大学）

オペラ公演

F.-J. フェティス《双子姉妹》（オペラ・コミック）

- ラファエル（オルガニスト）…………… 平賀僚太
- ラファエルの姪・双子姉妹
- ジュリア…………… 三浦梓
- ロゼット…………… 新福美咲
- ジョルジーニ（ラファエルの甥・姉妹のいとこ）
- …………… 盛合匠
- カルロ（ジュリアの夫）…………… 田村智仁郎
- ファビオ（ロゼットの恋人）…………… 近野桂介
- ピアノ…………… 中安義雄

2019年度日本音楽学会支部横断企画におけるオペラ公演（友利修、安川智子企画）



第3回「ベルギー学」シンポジウムの記録

開催要項

日時/会場	2021年12月10日(金) 駐日ベルギー王国大使館(招待制) 12月11日(土) オンライン開催
主催	第3回「ベルギー学」シンポジウム実行委員会、上智大学ヨーロッパ研究所
共催	日本ベルギー学会、ベルギー研究会
協力	駐日ベルギー王国大使館、公益財団法人鹿島学術振興財団
後援	公益財団法人アーツフランダース・ジャパン、ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁(WBI)、日本・ベルギー協会
サイト	https://www.jb150sympo.org/previous-symposia
参加者数	2日目 95名

プログラム

2021年12月10日(土) オープニングイベント

演奏会

ジョンゲン：ダンスレント、武満徹：翼

植川縁(サクソ)・守田絢子(ピアノ)

イザイ：無伴奏ヴァイオリンソナタより第2番『妄執』『憂鬱』『慈しみの女神たち』

坂口昌優(ヴァイオリン)

カウベルグ：ソロヴィブラフォンのための「7つのプレリュード」より第1・3・4番

高口かれん(ビブラフォン)

フェティス：ピアノとヴァイオリンのための「グランデュオ」より第2・3楽章

尾池亜美(ヴァイオリン)・飯野明日香(ピアノ)

2021年12月11日(土)

基調講演

駐日ベルギー大使館の歴史

奈良岡聡智(京都大学)

A Humble Policy Entrepreneur in a Changing Society: About Sufu Kōhei's Belgian Roots in Promoting the Rule of Law in Meiji Japan

Dimitri VANOVERBEKE (University of Tokyo)

研究発表

F.-J. フェティスの著述における日本音楽：フェティス没後150周年に寄せて

大迫知佳子(広島文化学園大学)

ルネ・マグリットの日本での受容——デザインとの関係を通して

利根川由奈(文教大学)

芥川龍之介とベルギー

澤西祐典(龍谷大学)

昭和初期における東京市富士小学校の教育とドクロリー・メソッドの思想的交渉

渡邊優子(文教大学)

ベルギーで学んだ最初の日本人は誰か？——いつ、何処で、何を

武居一正(福岡大学)

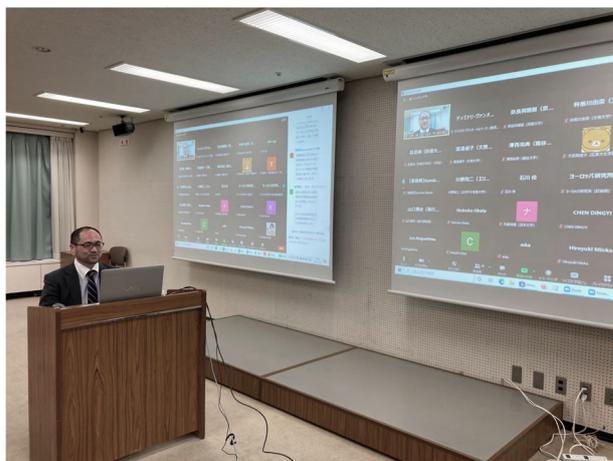
西ヨーロッパの十字路、リエージュの伝統産業と日本の安全保障

稲岡正記(住友商事株式会社)

パネルディスカッション

日本とベルギーの交流の歴史とこれから

上西秀明（ヘント大学）、奈良面聡智（京都大学）、ディミトリ・ヴァンオーヴェルベーク（東京大学）



シンポジウムを終えて

第3回「ベルギー学」シンポジウム、『日本とベルギーの交流史』は2021年12月10日および11日に開催された。場所は、駐日ベルギー王国大使館（第1日）、またZoom（第2日）によるオンライン開催であった。新型コロナウイルス感染症の影響が憂慮されたが、感染者数がやや落ち着きを見せていた時期であり、対策にじゅうぶん配慮し、大使館からほど近い上智大学会場に実行委員は控えることになった。

第1日はオープニングスピーチの後、ベルギーと日本に関する音楽の演奏が行なわれた。第2日には駐日ベルギー大使館の歩みと法制史の観点から、基調講演が行なわれた。それをうけて人文、社会科学、産業と安全保障などの観点からの日本とベルギーの交流に関する詳しい報告がなされた。

このシンポジウムのねらいのひとつに、ベルギーと日本の関係史をふり返り、将来を見通すにあたっての補助線とするということがあった。これはベルギー（および、ベルギー独立以前のことも考慮に入れるならば後にベルギーになる地域）が、大陸ヨーロッパでも早期から、近代化をすすめたことと無縁ではない。おりしも感染症によって両国間の往来がきわめて難しくなった時期でもあり、交流の意義を深く考える会合になったものとみたい。

上智大学ヨーロッパ研究所、日本ベルギー学会、ベルギー研究会、駐日ベルギー王国大使館、アーツフランダース・ジャパン、ベルギー王国フランス語共同体政府国際交流振興庁（WBI）、日本・ベルギー協会には共催、後援など運営面でたいへんお世話になった。そして公益財団法人鹿島学術振興財団には、心強い援助をいただいた。記して感謝したい。

第3回「ベルギー学」シンポジウム実行委員会
委員長 山口博史

第3回「ベルギー学」シンポジウム
to the Symposium on Belgian Studies
日本とベルギーの
交流史
Histories of Japan-Belgium relations

日時：2021年12月11日（土）9:30~17:15
DATE: 11th December 2021
会場：オンライン開催
主催：第3回「ベルギー学」シンポジウム実行委員会
上智大学ヨーロッパ研究所
ORGANIZER: Executive Committee for
the Third Symposium of Belgian Studies
European Institute Sophia University

Website:
<https://www.jobstudies.org>

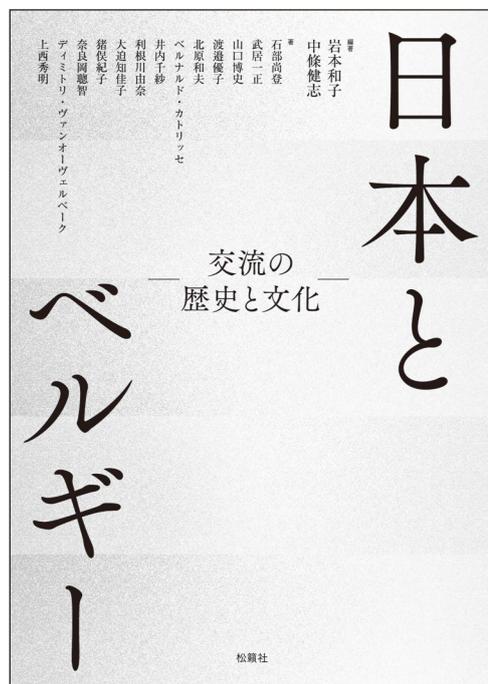
第3回『ベルギー学』シンポジウム—日本とベルギーの交流史—の成果をもとにした論文集です

日本とベルギー —交流の歴史と文化—

【編著】岩本和子、中條健志

【著】石部尚登、武居一正、山口博史、渡邊優子、北原和夫、ベルナルド・カトリッセ、井内千紗、利根川由奈、大迫知佳子、猪俣紀子、奈良岡聰智、ディミトリ・ヴァンオーヴェルベーク、上西秀明

- 2,800円＋税
- A5判・ソフトカバー・304頁
- 2023年12月15日刊行



交流がもたらした相互的影響と変化をさぐる

日本とベルギーは、150年以上にわたる交流の歴史をもつ。

距離的には遠く隔たった両国の間には、どのような交流があったのか。

それが双方にどのような影響を与え、どのような変化を生み出したのか。

両国の交流の歴史における諸現象を、法律や言語、メディアなどの多視点から

ひもとくとともに、交流の文化的実践のさまざまな様態を検証。

日本—ベルギーの交流が相互にもたらしたものを、複眼的・動的・立体的にさぐる。

【本書の主要目次】

第1部 交流の歴史

第1章 1866年の日白修好通商航海条約に関する歴史社会言語学的考察（石部尚登）／第2章 ベルギーで学んだ最初の日本人は誰か？（武居一正）／第3章 ベルギー大使の記録にみる関東大震災（山口博史）／第4章 ドクロリー・メソッドにおける「自己」（渡邊優子）／第5章 「日白修好150周年」はどのように語られたか（中條健志）

第2部 交流と文化

第6章 アメリー・ノトンと日本（岩本和子）／第7章 日本におけるベルギー・オランダ語文学の受容と翻訳出版の実態（井内千紗）／第8章 1960年代日本のグラフィック・デザインにおけるルネ・マグリットの受容（利根川由奈）／第9章 フランソワ＝ジョゼフ・フェティスの著述における日本音楽（大迫知佳子）

第3部 交流の「場」

日本とベルギーの交流の歴史とこれから 第3回「ベルギー学」国際シンポジウム パネルディスカッションより（奈良岡聰智、ディミトリ・ヴァンオーヴェルベーク、上西秀明、岩本和子・司会）

【コラム】

Belgique, le Cœur d'Europe（北原和夫）／ベルギー・日本間の50年にわたる文化交流（ベルナルド・カトリッセ）／ベルギー BDとはなにか？（猪俣紀子）

★全国書店、オンライン書店でご注文いただけます。

★弊社直販サイト「松籟社stores」にてご購入いただけます。QRコードはこちら→



〒612-0801 京都市伏見区深草正覚町1-34
TEL：075-531-2878 FAX：075-532-2309

松籟社

ウェブサイト <http://www.shoraisha.com/>
直販サイト <https://shoraisha.stores.jp/>

2023 年度

2023 年度は、西宮、東京、徳島で 3 回の研究会を実施しました。2024 年 3 月にはブリュッセルでの研究大会も予定されており、コロナ禍以前の状況——関東、関西、その他の地域、ブリュッセルでの研究会——に完全に戻ることとなります。また、12 月には第 4 回の「ベルギー学」シンポジウムも開催されます。

第 96 回研究会

日時 2023 年 9 月 23 日 (土) 14:00-17:30

会場 徳島大学常三島キャンパス 総合科学部 2 号館西棟 1 階音楽講義室

【発表】 井内千紗「オランダ語圏における文学対外普及の実態」

【発表】 白田由樹「アール・ヌーヴォーの変容と社会主義グループの動向をめぐる考察：1897 年の万博コンゴ展示をめぐる『現代芸術』誌と『民衆』紙の記事から」

【発表】 中條健志「日白交流史年表の検討」

【話題提供】 佐藤孝彦「南アフリカ渡航報告」

オランダ語圏における文学対外普及の実態

井内千紗 (拓殖大学)

ベルギー・オランダ語文学は隣国オランダの文学とともに、1990 年代以降、対外出版やプロモーションが強化され、ドイツや英語圏を中心に国際的なプレゼンス向上をはかる動きがみられる。本発表では、オランダおよびベルギー・オランダ語文学の対外出版の支援体制を整理し、オランダ語圏における文学支援の実態や日本に向けたプロモーションの取り組みを紹介する。さらに、1999 年に設立された支援機関「フランドレンの文学 (FlandersLiterature)」が、同文学の対外出版や普及に関し、どのような活動を実施しているのか、関係者への聞き取り調査の結果等をもとに報告する。

アール・ヌーヴォーの変容と社会主義グループの動向 をめぐる考察：1897 年の万博コンゴ展示をめぐる『現代芸術』誌と『民衆』紙の記事から

白田由樹 (大阪公立大学)

19 世紀末ベルギーにおいて、アール・ヌーヴォー建築と独自の装飾スタイルが欧州大陸でいち早く現れた社会背景と文化的土壌について、発表者はこれまで前衛芸術派と社会主義グループとの親密な関係の面から捉えてきた。H. ヴァン・ド・ヴェルドが示した「新しき芸術」の理念や創作の試行もこの文脈から読み直し、彼の「芸術の伝道」に記された“未開部族の芸術”への称揚は、当時の社会主義者や前衛芸術派のコミュニテ

ィで共有されていた一種の原始性志向に基づいていたとの見方を示した。しかし、現実の“黒人”や“未開部族”の芸術と交わる機会であったはずの 1897 年ブリュッセル万博のコンゴ独立国展示について、前衛派の芸術家や批評家の書いたテキストには、コンゴの諸部族の手による“芸術”への真の関心を読み取ることはできない。また、国王レオポルド二世のコンゴ統治に関してベルギー労働党がさまざまな抗議を示していく中、コンゴ展示館のデザインを担った前衛芸術派の仕事は前者からどのように受け止められたのか、という疑問が未解明のまま残されている。今回の発表では、自由美学関係の資料や『現代芸術』誌の記事と、労働党の機関紙『民衆』の報道・論説を対比させる中で、コンゴ問題をめぐる社会主義グループ内の矛盾と不一致を明らかにし、さらにそのことが 1900 年以降、ベルギー的スタイルが急速に衰退する要因のひとつとなった可能性について、考察をおこないたい。

日白交流史年表の検討

中條健志 (東海大学)

現在、2021 年 12 月に開催された「第 3 回『ベルギー学』シンポジウム——日本とベルギーの交流史」の登壇者をおもな執筆陣とする論文集『日本とベルギー——交流の歴史と文化』(2023 年 11 月、松籟社より刊行予定)の編集作業がすすめられている。そのなかで報告者は、掲載論文の内容をベースとした、両国の建国期か

らこんにちまでの「日白交流史年表」の作成を担当している。本報告では、そのプロセスで明らかになった日白交流の主要な側面、ならびに両国間の年表をおおやけにすることの意義を述べるとともに、校正中の年表を資料として配付したうえで、参加者間の議論をつうじ、より多くの研究分野からの考察や知見を加えてそれを完成させたい。

南アフリカ渡航報告

佐藤孝彦

お盆休みに南アフリカへ旅行し、主要都市(ヨハ

ネスブルク、ケープタウン、プレトリア)を巡った。アフリカ大陸でトップクラスの先進国であり、BRICSと言われるだけの経済力を感じた。一方、かつてのアパルトヘイトの名残は都市計画や雇用等で少なからず見受けられ、根絶できたとは言えない印象を受けた。また、ケープタウンでは、コンゴ民主共和国からの移民が多く、特に観光業でのコンゴ系のプレゼンスが高いようだった。同国の多民族性や植民地性については、時間が許せば、フィールドワークで調査していきたいくらいには、興味深い国であった。

第 95 回研究会

日時 2023年7月22日(土)13:30-16:45

会場 拓殖大学(ハイブリッド開催)

【発表】阿部孝子「三島由紀夫におけるヴェルハーレン「午後の時」第11連」

【発表】大西愛子「バンド・デシネとベルギー La Bombe 中のベルギー」

【話題提供】中條健志「ベルギー王国大使館別荘特別公開に参加して」

【報告】岩本和子「(1)WBI 助成によるベルギーフランス語文学翻訳プロジェクト、(2)スネップ城レジデンスの「翻訳者たち」」

三島由紀夫におけるヴェルハーレン「午後の時」第11連

阿部孝子

三島由紀夫が10代の時の友人、東文彦という人物は、学習院文芸部の先輩で、三島と共に同人誌を作り、励まし合いながら小説執筆に取り組んだ。文彦にベルギーの詩人ヴェルハーレンの詩「午後の時」をよい詩として三島が紹介したところ、文彦は「午後の時」を意図的に重ねて小説「午後の時」を執筆し、精神的葛藤を乗り越えた幸福を描いた。三島が18歳の時に、文彦は23歳で病没する。文彦の死後、三島は謡曲のような組み立て方をして、文彦の作品や思い出を織り込んで小説「岬にての物語」を書いたと考えられる。「岬にての物語」が構想される際に、二人の思い出の詩「午後の時」が重要な発想源となっている可能性がある。文彦が読むことができたのは高村光太郎訳「午後の時」第1~13連で、その中でも特に第11連が基盤となって「岬にての物語」が成立していると言える。この連のイメージは、三島の生涯を通じて大きな役割を果たし、晩年の大作にまで続いていく。

バンド・デシネとベルギー La Bombe 中のベルギー

大西愛子(フランス語翻訳者)

発表者は7月にバンド・デシネ『La Bombe 原爆 科学者たちは何を夢見たか』を翻訳出版した。本書は広島に落とされた原爆がどのようにして造られたか、その背景などを詳しく総合的に描いた作品である。三人の作者はそれぞれベルギー、フランス、ケベックと出身が異なる。それでもこの作品がベルギーと深くかかわっている理由とは?15年以上バンド・デシネの翻訳に関わってきた得た気づきなどに基づき、バンド・デシネとベルギーの関わり、また本書におけるベルギー的な要素などを紹介する。

ベルギー王国大使館別荘特別公開に参加して

中條健志(東海大学)

6月30日から7月2日まで、栃木県日光市にあるベルギー王国大使館別荘の特別公開がおこなわれた。これは、1928年に建てられた同別荘が2023年に築95周年を、また、栃木県が県制150周年をむかえたことを記念する行事で、通常は非公開の建物が一般公開された。本報告の目的は、特別公開の形態——告知、応募、開催方法——、見学の内容、またそれらにかんする報道について話題提供をおこない、外国大使館別荘が集まる地域における、ベルギー王国大使館(別荘)の特

徴について考える機会をつくることである。

あわせて、関連行事として栃木県立日光自然博物館で開催された「ベルギー王国企画展」、ならびに同博物館前でおこなわれた「ベルギー王国マルシェ」の見学についても報告する。

(1) WBI 助成によるベルギーフランス語翻訳プロジェクト

岩本和子 (神戸大学)

ワロニー＝ブリュッセル連合政府の支援及びフランス語共同体政府国際交流振興庁 (WBI: Wallonie-Bruxelles International) の助成により、ベルギーのフランス語文学の日本への紹介・普及を目的とした会を立ち上げるようになった。元 WBI 学術・文化交流日本担当

セリーヌ・マリアージュ氏が着手した翻訳者ネットワークを基に、ブリュッセル WBI ともオンラインで繋ぎ、新刊書・古典文学・BD・子供向け文学の紹介や勉強会を開催し、邦訳出版も目指す。この会の紹介と参加の呼びかけを行いたい。

(2) スネッフ城レジデンスの「翻訳者たち」

ワロニー＝ブリュッセル連合政府の助成により、コロナ禍を経て 2022 年 8 月に「文学レジデンス (翻訳・執筆)」が再開された。各国からのベルギーフランス語文学翻訳者とベルギー人作家の十数人が、Seneffe 城のレジデンスに約 1 か月滞在して翻訳・執筆作業と交流を行った。参加者の一人として、その内容や意義について報告する。また個性的な翻訳者・作家たちの生態やその後についても語っておきたい。

第 94 回研究会

日時 2023 年 5 月 13 日 (土) 14:00-17:15

会場 西宮市大学交流センター講義室 3 (ハイブリッド開催)

【発表】 馬場智也「マリー・ゲヴェルス、マドレーヌ・ブールドゥクス作品にみる私的空間——「アンティミスム」の再解釈に向けて」

【発表】 永井友梨「ジェームズ・アンソールに関する報告 ①研究テーマ：アンソールとジャポニスムについての進捗状況、②「クビーンとアンソール」展の展覧会評、③ 11 年ぶりの開館・アントワープ王立美術館について」

【訳書紹介】 吹田映子「アリックス・ガラン『わたしを忘れないで』(太郎次郎社エディタス、2023 年)」

マリー・ゲヴェルス、マドレーヌ・ブールドゥクス作品にみる私的空間——「アンティミスム」の再解釈に向けて

馬場智也 (京都大学大学院博士課程)

本発表は、二十世紀前半のベルギーを代表するフランス語作家マリー・ゲヴェルス (Marie Gevers, 1883-1975) とマドレーヌ・ブールドゥクス (Madeleine Bourdouxhe, 1906-1996) の作品を対象に、家や庭といった私的空間と人間の関係性を問い直すものである。ベルギーないしフランスの「アンティミスム intimisme」の芸術傾向を俎上に載せ、同傾向において先述の私的空間が主題とされながらも、そうした空間に最も密接に関係するはずの人物、すなわち家庭を直接運営する主婦や女中、また家庭の中で成長していく子供の視点が欠落していることを指摘する。従来のアンティミスムの議論では、私的空間を「見る」ことが重視されてきた。対して両作家の作品には、家事や遊戯といった具体的な「動作」を中心とした関係性が構築されている。本研究では前者の「視覚的アンティミスム」に対して、

後者の「動作的アンティミスム」のあり方を明らかにしていく。

ジェームズ・アンソールに関する報告 ①研究テーマ：アンソールとジャポニスムについての進捗状況、②「クビーンとアンソール」展の展覧会評、③ 11 年ぶりの開館・アントワープ王立美術館について

永井友梨 (リエージュ大学博士課程)

本発表では、ジェームズ・アンソールに関する三つの報告を行う。まず、発表者の目下の研究テーマであるジャポニスムとの関連についての進捗を述べる。(これまで不明だった模写の出典の判明等。) 続いて、アンソール美術館にて今年 4 月まで開催された『クビーンとアンソール』展を紹介する。この展覧会はオーストリアの版画家兼イラストレーターであるアルフレート・クビーン (Alfred Kubin : 1877-1959) におけるアンソールからの着想に焦点を当てた初の展覧会である。ここで扱われたクビーン作品の殆どが図録化されて

いない貴重なものであり、小規模ではありながら大変有意義な展覧会だったのでお知らせしたい。

最後に、「永遠に終わらない」とまで揶揄された大規模改修工事から 11 年ぶりに再開したアントワープ王立美術館についても紹介する。当初、2017 年に再開予定だったが、毎年延期が発表され続けながら、2022 年秋についに再オープンを果たした。また、先日アントワープ王立美術館にて行われたアンソールワークショップで享受した諸情報も共有したい。

訳書紹介：アリックス・ガラン『わたしを忘れないで』
(太郎次郎社エディタス、2023 年)

吹田映子 (自治医科大学)

発表者は今年 3 月にベルギーのバンド・デシネを翻訳出版した。作品はアリックス・ガランによる『わたし

を忘れないで』(原題：Ne m'oubliez pas)。作者のデビュー作であり、『レ・シュトゥルumpf』でお馴染みのル・ロンバル社から 2021 年に出版された。本作の主人公クレマン스는、認知症を患う祖母を介護施設から連れ出し、祖母が子どもの頃に住んでいたという家を探して旅に出る。祖母と孫娘によるこの冒険を通して、実質四代にわたる母と娘の「対話」が展開されるのだが、同時に本作は「老い」や「性」、「記憶と忘却」、「生と死」等の主題に真正面から取り組んでいる。本作の特徴は、このようにシリアスとも言える内容が、温かみのある線とカラフルで透明感のある色彩によって、軽やかに描かれている点にあるだろう。本発表では、どのような経緯で発表者が本作を翻訳することになったのか、また、本書の見どころについて紹介する。

2022 年度

2022 年度は、5 月に研究会をオンライン開催し、7 月には久しぶりに——2020 年 3 月以来、実に 869 日 (!)、2 年 4 ヶ月 17 日ぶりに——明治大学で対面開催を実施することができました。その後は、都城とブリュッセルで研究会を対面開催しました。

第 93 回研究会 ブリュッセル大会

日時 2023 年 3 月 10 日 (金) 13:00-18:00

会場 ブリュッセル自由大学 (ULB)、Campus Solbosch 503, Bâtiment R42

【発表】 中條健志「植民地の過去とむきあうミュージアム：オランダ、フランス、ベルギーの事例から」

【発表】 井内千紗「オランダ語文芸作品にみるフラーンデレン地域の言語文化的特性」

【発表】 石部尚登「ベルギーを「通過」する人たちについて」

【発表】 松井真之介「ヤズィーディー教徒のアイデンティティ意識：リエージュ、アルメニアのディアスポラ間比較」

【発表】 森田美里「ベルギーのバンドデシネ『クロコダイル』と日本の大学生」

【発表】 大迫知佳子「世紀転換期のベルギーにおける「ベルギー」音楽民謡との関係を軸に」

【発表】 山内瑛生「Belgitude から Belgité へピエール・メルテンス『王の平和』とアラン・ベレンボーム『この王国における危機』をめぐって」

植民地の過去とむきあうミュージアム：オランダ、フランス、ベルギーの事例から

中條健志 (東海大学)

2018 年 12 月 9 日、王立中央博物館がアフリカ・ミュージアム (Africa Museum) としてリニューアルオープンした。本発表の目的は、植民地博物館として設立されたミュージアムが、その後の改築や改装を経たのち、現代において植民地の過去とどのようにむきあっているのかについて、三国間で比較検討をおこなうこ

とである。

対象とするミュージアムは、ベルギーの Africa Museum (1910 年開館) にくわえ、オランダのトロペン博物館 (Tropenmuseum 1926 年開館)、フランスの国立移民歴史館 (Musée de l'histoire de l'immigration 1931 年開館) である。これら三館はいずれも近年開館あるいは改装され、そのさい、旧宗主国による植民地主義の問いなおしが試みられた。

発表では、各館の目的および展示内容の特徴、なら

びに、ベルギーとオランダの二館がフランスのミュージアムの設立にあたえた影響について述べる。

オランダ語文芸作品にみるフランドレン地域の言語文化的特性

井内千紗 (拓殖大学)

フランドレン地域における言語事情は、ベルギー国家独立以来、段階的に変化してきており、それは各時代の政治、政策や現実社会のみならず、映像作品、舞台芸術や文学の表現にも影響を与えている。フランドレン地域の文芸作品を国外に広めるためには、同地域の言語に関連する文化的要素をうまく伝達するための工夫が求められる。本報告では上記の背景をふまえ、第二次世界大戦後に発表されたフランドレン地域の文芸作品をいくつか取り上げ、具体的にどのような特徴がみられるのか、オランダ語の言語内多様性および他言語との関係の二つの観点から紹介する。さらに、そのような作品を国際的に広める際に生じる課題についても触れる。

ヤズィーディー教徒のアイデンティティ意識：リエージュ、アルメニアのディアスポラ間比較

松井真之介 (宮崎大学)

学術的な資料や調査の蓄積が少なく、謎に包まれた集団であったが、近年、ダーイシュ (IS) による迫害、そしてそれを描いた『ナディアの誓い』によって皮肉にも世界的に注目を浴びつつあるヤズィーディー教徒に関して、ヤズィーディー教とは何か、ヤズィーディー教徒とは誰か、一般的にどのような特徴があるのかをまずひも解く。そして彼らは自分をどう定義し、周囲からどのように「見られている」のかを中心に比較分析する。比較対象は報告者が実際に訪問調査したベルギーのリエージュのコミュニティとアルメニアのコミュニティだが、特にアルメニアのコミュニティで得られた知見をもとに、ディアスポラのコミュニティがどのように変容しつつあるのかを検討する。

ベルギーのバンドデシネ『クロコダイル』と日本の大学生

森田美里 (京都外国語大学)

2022年8月、ベルギーのバンドデシネ『クロコダイル ワニみたいに潜む日常のハラスメントと性差別、そしてその対処法』(トマ・マチュー著)の日本語翻訳版が出版された。本作品のテーマは、女性に対する路上でのハラスメント(性的嫌がらせ)・性被害を含むセク



シズム(性差別)であり、全て実際の被害証言に基づいて漫画化されている。同時に、被害に遭った場合、どのように対処すべきか描かれている。

本発表では、著者と翻訳者を招き、本学で行われた講演会を聴いた大学生のコメントの傾向を分類し、彼らが何を感じ、何を学んだかを報告する。また、ベルギー発信の作品を日本語に翻訳し出版すること、著者を招いての講演会を日本の大学で開催することについての意義も示したい。

世紀転換期のベルギーにおける「ベルギー」音楽民謡との関係を軸に

大迫知佳子 (広島文化学園大学)

国家独立以降、ベルギーの音楽における独自性を模索することが、ベルギー人音楽家の重要な課題のひとつとなった。模索の過程において、世紀転換期から20世紀初頭にかけて行われたのが、「ベルギー」を冠した民謡集の刊行である。この動きは1932年にベルギー国民教育・文化省が立ち上げた「古い民謡に関する国家委員会」へと発展してゆく。

世紀転換期ベルギーの音楽における独自性と民謡との関係を論じた先行研究はベルギーのフランドル地域とワロン地域の民謡運動を別々に取り上げ、主として、それぞれの地域の音楽における独自性に焦点をあてて論じている(Scheiff 2018)。しかし、ベルギーの民謡に関する音楽家たちの著述には、彼らが音楽の独自性を巡って地域と国との間を揺れ動く様を見て取ることができる。

本発表では、この時期のブリュッセルで出版されたベルギーの民謡(選)集に見られる記述を、その周辺の記述も含めて分析・整理する。それによって、これらの民謡集を通して「ベルギー音楽」の在り方がどのように議論されたのかを明らかにし、ベルギーの音楽における独自性模索の過程の、新たな側面を提示したい。

Belgitude から Belgité へ——ピエール・メルテンス『王の平和』とアラン・ベレンボーム『この王国における危機』をめぐって

山内瑛生（東京大学・ブリュッセル自由大学）

1970年代後半から1980年代前半にかけてベルギーの知識人の間で議論を巻き起こした、ベルギー・アイデンティティの不在性や不安定性を強調する「ベルジチュード belgitude」という概念は、1990年代以降その定

義困難さや多様性をより肯定的に捉える「ベルジテ belgité」の概念につながった。ブリュッセルが主な舞台として選ばれているピエール・メルテンス『王の平和』とアラン・ベレンボーム『この王国における危機』は、それぞれ「ベルジチュード」、「ベルジテ」と共鳴する小説である。両作品に現れたベルギーの描写を検討することで、「ベルジチュード」「ベルジテ」という言葉の意味するものがより明確になるだろう。

第92回研究会

日時 2022年9月24日（土）14:00-18:00

会場 南九州大学都城キャンパス・本館6階演習室

【発表】 Didier Martens, Les faux Primitifs flamands de Joseph Van der Veken

【発表】 白田由樹「世紀末ヨーロッパ文化研究におけるベルギーの位置づけ——共著企画『装飾の夢と転生』のふり返りと今後の課題」

【発表】 中條健志「『日白修好150周年』はどのように語られたか——メディア談話の分析をつうじて」

【発表】 井内千紗「翻訳出版にみるベルギー・オランダ語文学と日本」

【発表】 石部尚登「公用語との関係からみたベルギーにおけるパトワ概念」

Les faux Primitifs flamands de Joseph Vander Veken

[ジョゼフ・ヴァン・デル・ヴェーケンの初期フランドル絵画贋作]

Didier Martens (Université Libre de Bruxelles)

ジョゼフ・ヴァン・デル・ヴェーケン Joseph Van der Veken (ヨーゼフ・ファン・デル・フェーケン?) は1872年アントウェルペン生れ、1964年ブリュッセル没である。修復家と、15・16世紀初期フランドル絵画偽作者の二刀流の人生を送った。1900-1920年に贋作を制作したようだ。作品は彼の古美術店 Early Art Gallery から流通していった。本発表では先ず導入として、1、ジョゼフ・ヴァン・デル・ヴェーケンを紹介し、2、同時代の偽作者ハン・ファン・メーヘレン（オランダ人1887年生れ、1957年没、フェルメールとフランス・ハルスの贋作を制作）と比較することによって、ベルギーの偽作者ヴァン・デル・ヴェーケンの制作手法や人生を浮き彫りにする。そして、3、彼の作品が長い間贋作と認められることなく、専門家も欺かれていた理由と贋作と発見されるに至った経過を語る。4、本論では、マルテンス氏自身がドイツで発見した彼の作品について、所有者の紹介、作品の紹介、作品同定の根拠を示しながらヴァン・デル・ヴェーケンの傑作について語る。

[訳：平岡洋子]



世紀末ヨーロッパ文化研究におけるベルギーの位置づけ——共著企画『装飾の夢と転生』のふり返りと今後の課題

白田由樹（大阪公立大学）

本発表では、報告者がドイツ語・フランス語圏の文学・文化研究者を軸に、建築や美術史等の分野の研究者にも協力を得て行ってきた装飾芸術研究（2016-20年）の成果として、今年10月に刊行する『装飾の夢と転生——世紀転換期ヨーロッパのアール・ヌーヴォー』の紹介とともに、対象国と研究分野を横断する共著書を編纂する際の悩みや、相互の照合から見えてきた接点について報告する。

この研究では、建築や室内装飾のつくり手と仲介者、顧客の関係を扱う中で、各地域の装飾芸術をめぐら

向性の選択や、報道・批評の反響を検討し、ベルギーの動向や背景についての概説と論考をイギリス、フランスの合間に差し込みつつ、研究への足がかりを作ってきた。さらに、視覚芸術と報道の言説、文学テキストの描写と語りの照応という視点も取り入れながら、今後の課題として、象徴派的傾向との関係や、20世紀からのグラスゴー派とウィーン工房スタイルへの接近、さらに古典主義への回帰という推移をどう跡づけていくかについて検討し、会場での意見交換を行いたい。

「日白修好 150 周年」はどのように語られたか——メディア談話の分析をつうじて

中條健志 (東海大学)

本報告の目的は、2016年の「日白修好 150 周年」をめぐって、日本とベルギーにおけるメディア報道を談話資料に、とりわけ交流の意義がどのように語られたのかを分析することで、日白交流の一端を明らかにすることである。そこでは、新聞・雑誌記事および映像メディアでの発言を談話資料として用いた。分析結果からは、両国ともに経済的側面がその意義として強調されていた一方で、日本においては、ベルギーで活動する日本企業が果たす役割に、ベルギーにおいては、王室・皇室関係の歴史により力点がおかれていたといえる。また、同年3月におこったテロ事件の影響から、日本においては、「移民・難民問題」という文脈のなかでベルギーの様相がしばしば描かれていたことも、その特徴として挙げることができる。

翻訳出版にみるベルギー・オランダ語文学と日本

井内千紗 (拓殖大学)

ベルギー・フラーンデレン地域のオランダ語文学は、元々民族運動の一環として発展したという歴史的経緯から、「ベルギー文学」よりも「フラーンデレン文学」と

してのアイデンティティが強い。他方、国際的な流通という観点では、「オランダ文学」「オランダ語文学」として隣国オランダと歩調を合わせた流通戦略をとっている。しかしながら周知の通り、世界では英語を中心にフランス語、ドイツ語の作品が翻訳出版市場を席卷しており、オランダ語の文学は、他のヨーロッパ諸国の文学と比較しても認知度が低だけでなく、他の分野の芸術文化ほどの国際的な発信力を得るに至っていない。本発表では以上の状況をふまえ、ベルギー・オランダ語文学が日本(かつ国際的)にプレゼンスが低い要因を探ることを目的とする。近代化の過程における翻訳文学史、対外出版政策とオランダ語の関係、およびこれまでの翻訳出版の実績をもとに、日本におけるオランダ語文学受容の一端を明らかにし、対日出版がかかえる課題を整理する。

公用語との関係からみたベルギーにおけるパトワ概念

石部尚登 (日本大学)

本報告では、ベルギーの19世紀における国会討論を事例として、「パトワ」というフランス語に特有の概念の意味の複層性および意味の構築性について報告する。具体的には、1860年代以降にフランス語話者とオランダ語話者の言語対立の主要な場となり、かつ双方がフランス語で議論を行ったベルギー国会(上院・下院)で「パトワ」が実際に用いられたテキストを分析し、(1)フラーンデレン人政治家とワロン人政治家が互いに異なる「パトワ」観を有していたこと、また、(2)そうした独自の「パトワ」観の構築が国内外の社会言語学的状況に起因する必然のものであったことを示す。以上の分析を通して、「パトワ」の概念が使用者やその外的状況により意味を変化させる過程、すなわち外的環境により「パトワ」の意味が構築される過程を明らかにする。



第 91 回研究会

日時 2022 年 7 月 24 日 (日) 13:30-17:00

会場 明治大学駿河台キャンパス研究棟 4F 第二会議室

【発表】 安彦良紀「ベルギーにおけるラップミュージックの独自性、社会性に関する考察」

【発表】 小川秀樹「ウィリアム・アダムスとフランドル——三浦按針は英国人か、「青い目のサムライ」か」

【発表】 梅澤礼「エティエンヌ・ド・グレーフの修行時代：ヘール、ポーラン、そしてルーヴェン」

ベルギーにおけるラップミュージックの独自性、社会性に関する考察

安彦良紀 (大阪市立大学大学院後期博士課程)

1980 年代の終わりごろに、アメリカからヒップホップ文化の一要素として欧州諸国に伝来したラップミュージックは、本場アメリカや近隣諸国のシーンの影響を受けつつも、各地で独自の市場や様式が築かれてきた。ベルギーにおいても、ブリュッセル首都圏地域やリエージュ都市圏を中心に独自のシーンが築かれている。

本発表では、ヒップホップ文化の発祥地アメリカや、フランス語圏のヒップホップシーンの中心地であるフランスとの比較を通して、ベルギー、とりわけブリュッセル首都圏地域とワロン地域における、ラップミュージックの表現様式の特徴や独自性、さらには社会性について考察する。具体的には、ベルギーのラップミュージックが、ローカルからグローバルに発展した経緯について検討しつつ、都市の中心部で活動を行うラッパー達の「現場」や、ローカルなアイデンティティを歌う歌詞表現に着目する。また、本発表では、今後の研究計画についても報告したい。

ウィリアム・アダムスとフランドル——三浦按針は英国人か、「青い目のサムライ」か

小川秀樹 (元千葉大学・岡山大学)

16 世紀に世界に覇を唱えたのはポルトガル・スペインであり、その時代は同時にネーデルラントでもその南部のフランドルが栄え、中心都市アントワープの黄金時代でもあった。そのアントワープの黄金時代は、世紀が深まるにつれて宗教紛争、そしてネーデルラント独立戦争の始まりの時代にもなり、人材の大規模な域外流出を伴った。こうしてフランドル(やノルマンディー)はノルマン征服以降、対岸のイギリスへ大きな影響を及ぼし続けた。

一方で 1600 年にウィリアム・アダムスの操舵により豊後に来航したリーフデ号に始まり、長い江戸時代の

鎖国中も中国と並んで日本との通商を長崎の出島にて許されたオランダ(北ネーデルラント)はフランドルの繁栄を引き継いだものだが、しかしそれを南ネーデルラント、つまり今のベルギーとの関係で見ることは稀である。

そのウィリアム・アダムスは、徳川家康の信頼を勝ち得て大いに活躍したが、未だに多くの謎を秘めた人物でもある。アダムスの生き様を時代と地域の連結点であるフランドル的な視点から考えることがその謎を解くうえで決定的に重要な要素になりうるとは、私自身も含めて、今までまったく考えられては来なかった。本発表では、フランドルを中心にした当時の「人の移動」と「人の繋がり」を手掛かりにアダムスの行動や出自を解明していく。

エティエンヌ・ド・グレーフの修行時代：ヘール、ポーラン、そしてルーヴェン

梅澤礼 (富山大学)

エティエンヌ・ド・グレーフは犯罪学者として、そして作家として、ベルギーはもちろんヨーロッパやアメリカ大陸でも知られている。しかし、もともと精神科医を目指していたはずの彼は、なぜ医学の道にとどまろうとしなかったのか。

ド・グレーフの犯罪学理論と小説については、これまでもベルギー研究会で発表してきたとおりである。本発表では彼のそうした成功の陰にある修行時代の挫折を、ヘール(開放型精神病院のある町)、ポーラン(聖母が出現した町)、ルーヴェン(ド・グレーフが学び、教えた町)の三つの町に注目して追ってみたい。

なお、本発表は現在執筆中であり本年度出版予定の『犯罪学者が「読み解いた」殺人犯の心理——エティエンヌ・ド・グレーフ——』の第一部の内容である。20 世紀前半のベルギーの歴史について、フラマン語表記についてなど、この機会にさまざまなご指摘をいただけると幸いである。

第 90 回研究会

日時 2022 年 5 月 28 日 (土) 16:30-19:30

会場 オンライン開催

【発表】 阿部孝子「日本近代文学におけるエミール・ヴェラーレンの受容(三島由紀夫以前)——東文彦「午後の時」を中心にして」

【発表】 山内瑛生「ブリュッセル人作家と「大きな」文学 (grande littérature)——ジャクリーヌ・アルプマン『オルランダ』をめぐって」

【話題提供】 斎藤至「近代ベルギー＝フランス音楽の実演動向——フランク・メモリアル、《イザイとサン＝サーンス》企画公演から」

日本近代文学におけるエミール・ヴェラーレンの受容 (三島由紀夫以前)——東文彦「午後の時」を中心にして

阿部孝子

ベルギーを代表する象徴派の詩人エミール・ヴェラーレンは、同時代の詩人として明治期日本に紹介された。それ以来、大正、昭和初期と、日本でも非常に人気のある詩人であった。しかし第二次世界大戦後の時代思潮の大きな変化もあり、戦後日本では忘れ去られてしまったと言える。多様なジャンルの詩を作ったヴェラーレンの全体像を把握することは、今の日本ではまだ行われていない。今回の発表では、その中でも特に大正から昭和にかけてヴェラーレンの詩を翻訳した高村光太郎の業績を示すと共に、光太郎訳の詩「午後の時」を十代の三島由紀夫とその友人、東文彦が読んでいたことを紹介する。そして無名の作家、東文彦に焦点を当てて分析を行う。ヴェラーレンの詩「午後の時」と文彦の小説「午後の時」とのつながりは、三島に深い影響を及ぼしていると推測される。

ブリュッセル人作家と「大きな」文学 (grande littérature)——ジャクリーヌ・アルプマン『オルランダ』をめぐって

山内瑛生 (東京大学・ブリュッセル自由大学)

「世界文学」という各国語文学の枠を超えたシステムを考慮に入れる際、ベルギー・フランス語文学は、「フ

ランス文学」を中心とする「大きな文学 (la « grande » littérature)」の象徴的支配下に置かれた「小文学 les petites littératures」に属すると言える。ブリュッセル出身の小説家ジャクリーヌ・アルプマン (1929-2012) が 1996 年に発表した『オルランダ』にも、「小文学」の作家に特有の「大きな文学」から受ける抗えない影響力と、それを逃れようとする動きというアンビヴァレンスを読み取ることができる。「大きな文学」というキーワードを通じて、アルプマンをはじめとする現代のブリュッセル人作家の複雑なアイデンティティの諸相に迫ることが可能になるだろう。

近代ベルギー＝フランス音楽の実演動向——フランク・メモリアル、《イザイとサン＝サーンス》企画公演から

斎藤至 (古典鍵盤楽器愛好家)

昨年そして今年は、セザール・フランク (1822-1890) およびカミーユ・サン＝サーンスというベルギー＝フランス近代音楽の楽統を支える二大巨匠が相次ぎアンバーサリーを迎える。しかし両者の作品は《ヴァイオリンソナタ》《動物の謝肉祭》などを除き一般には実演が珍しい。今回は、その近年の演奏動向と反響を概観し、日本におけるその受容について関心を深めるチャンスを提供したい。

2021 年度

2021 年度は 3 回の研究会をすべてオンライン開催しました。なお、12 月には一年間延期されていた第 3 回「ベルギー学」シンポジウム——日本とベルギーの交流史——をオンラインで開催しました。

第 89 回研究会

日時 2021 年 9 月 18 日 (土) 16:00-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 安彦良紀「パリ、及びブリュッセルの首都圏におけるヒップホップシーン——発生と変遷、現状についての比較研究」

【発表】 白田由樹「世紀末ベルギーにおけるアール・ヌーヴォーの支援者たちとコミュニティ」

【話題提供】 山口博史「ベルギーとモータースポーツ」

パリ、及びブリュッセルの首都圏におけるヒップホップシーン——発生と変遷、現状についての比較研究

安彦良紀（大阪市立大学大学院後期博士課程）

本報告の目的は、パリ、及びブリュッセル都市圏のヒップホップシーンを比較し、双方の特徴や差異、独自性について考察することにある。また、本報告では、ヒップホップの4大要素（ラップ、グラフィティ、Dj、ブレイクダンス）の中でも、とりわけラップミュージックに着目する。

ニューヨークのゲットー発祥の文化であるヒップホップは、1970年代後半から80年代前半にかけて、フランス語圏地域に伝来し、パリやブリュッセルなどの大都市とそれらの周辺地域を中心に、変遷を繰り返しつつ独自のシーンを築き上げてきた。とくに、フランス語圏のラップミュージックに関しては、若者を中心に多大な人気を博しており、発祥国のアメリカを包含する英語圏に次ぐ市場規模と言われている。

パリ、及びブリュッセルの都市圏は、1980年代から90年代にかけての、フランス語圏におけるヒップホップの黎明期から、今日に至るまでのシーンを語る上で最も重要な土地であり、それぞれを拠点とする担い手達によって、フランス語圏ヒップホップは発展を遂げてきた。本報告では、ラップミュージックを中心に、それぞれの都市圏におけるローカルシーンの発生から、今日に至るまでの変遷、現状について比較検討する。

世紀末ベルギーにおけるアール・ヌーヴォー支援者たちのコミュニティ

白田由樹（大阪市立大学）

ベルギーのアール・ヌーヴォーは、反伝統的な前衛芸術や社会主義の動向と結びつき、同時代にヨーロッ

パ大陸でおこった応用芸術運動の中でもとくに左派的色合いが強かったと言われている。実際、芸術サークル「二十人会」から改組された「自由美学」の会員の多くが、ベルギー労働党のメンバーと重なっており、個人または団体として、この新スタイルの応用芸術や建築の顧客となっている。一方、アール・ヌーヴォーの作家たちは、1897年のブリュッセル万博でコンゴ独立国の展示館にも登用され、植民地のプロパガンダを担うが、この際、建築家や応用芸術家たちをベルギー王室に仲介したのは「自由美学」のメンバーであった。本発表では、こうした団体や主要人物の関係を（固有名詞の表記とともに）改めて整理する。また、1900年代初頭にアール・ヌーヴォーが衰退する要因のひとつとして、労働党のE. ヴァンデルヴェルデによるコンゴ政策批判や、左派グループ内の不統一性が顕在化したことが影響している可能性についても考察してみたい。

ベルギーとモータースポーツ

山口博史（徳島大学）

モータースポーツ愛好者の間ではベルギー、アルデンヌにあるサーキット「スパ・フランコルシャン」、とりわけチャレンジングなコーナーである「オー・ルージュ〜レディヨン」はよく知られている。ただ、このサーキットとベルギーの特徴を結びつけて考えるモータースポーツファンは日本ではそれほど多くない。今回はこのサーキットの歩みと特徴の紹介をとおしてベルギーの歴史への位置付けを試みたい。またこのサーキットを駆け抜けたレーサーとチーム、マシンなどの紹介を行ない、ベルギーから世界の一端を「ちょっといかがう」ような話題提供を行ないたい。

第88回研究会

日時 2021年7月31日（土）16:30-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 小田英「近世ネーデルラントの80年戦争におけるフーゴー・グロティウスの政治思想」

【発表】 井内千紗「フランドレン地域におけるジャン・レー／ジョン・フランダース作品の受容と言語」

【話題提供】 斎藤至「近代ベルギー音楽史の中の C. フランク、およびそのピアノ書法」

近世ネーデルラントの 80 年戦争におけるフーゴー・グロティウスの政治思想

小田英 (ライデン大学)

本報告では、近世ネーデルラントのいわゆる 80 年戦争 (1568-1648) の政治思想的側面を主題とする。とくに、オランダの国際法学者として有名なフーゴー・グロティウスの『捕獲法論』(De jure praedae) (1603-5) に着目する。

本書はオランダ東インド会社によるポルトガル船カタリナ号の襲撃と積荷強奪を正当化すべく書かれたため、長らく、17 世紀におけるオランダの海外拡張を正当化するためのものと考えられてきた。この解釈自体に大過ないものの、その海外拡張は 80 年戦争の枠組みから生じてきた面もあるので、『捕獲法論』もその枠組みのもとで捉えなおしてみたい。

フランドレン地域におけるジャン・レー／ジョン・フランダース作品の受容と言語

井内千紗 (拓殖大学)

本報告は、20 世紀のベルギーにおいて、使用言語は小説家の活動にどのような影響を与えていたのか、ジョン・フランダースを対象に考察することを目的とする。フランス語圏で「ベルギー幻想文学の大家」として知られるジャン・レー (1887-1964) は、ジョン・フランダースという別のペンネームを使い、母語であるオラ

ンダ語でも多くの作品を世に残した。オランダ語の作品は、主に雑誌や新聞に掲載するための短編がほとんどで、なかでも青少年向けの作品が多いのが特徴である。その影響もあり、ジャン・レーとジョン・フランダースは同一人物であるにもかかわらず、そのイメージは、言語圏によって大きく異なる。本報告では、まず、活動遍歴を整理するとともに、ジョン・フランダースが大きく関わった雑誌を事例に、彼の作品がフランドレン地域においてどのように受容されてきたのかを確認する。これらをふまえ、使用言語がジャン・レー／ジョン・フランダースの作家としての活動に与えた影響について、出版、翻訳事情も考慮に入れながら検討する。

近代ベルギー音楽史の中の C. フランク、およびそのピアノ書法

斎藤至 (古典鍵盤楽器愛好家)

セザール・フランク (1822-1890) は、フランス近代音楽の学統を受け継ぎ、また敬虔な教会オルガニストとしての内面性と奏楽経験に裏付けられたピアノ作品を遺している。本報告では、その生涯とベルギー音楽史上における位置付けを概観しつつ、彼のピアノ書法に現れる特徴を、楽理的観点も交えつつ音源と共に例示し、当会会員がその音楽文化に接するチャンスを提供したい。

第 87 回研究会

日時 2021 年 5 月 29 日 (土) 17:00-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 岩本和子「ジャン・レー『マルペルチュイ』をめぐる都市と神話について」

【発表】 武居一正「Loi pandémie の制定について」

ジャン・レー『マルペルチュイ』をめぐる都市と神話について

岩本和子 (神戸大学)

ベルギー幻想文学の特徴を、ジャン・レーのフランス語長編小説『マルペルチュイ *Malpertuis*』(1943)を通して考察する。ジャン・レーは古典／規範的〈ベルギー幻想派〉の代表として、しばしば優美な語句や文体で悪

魔や幽霊など古風なテーマを 1 人称の主人公に語らせ、20 世紀にあってなお 19 世紀的な過去の時間を提示する作家とされている。『マルペルチュイ』では古代の神々が「現代」に引き寄せられ、壮大な神話の世界とフランドレンの一都市の日常生活との不思議な並存が複数の手記を元に語られて、幻想と現実とが入り混じる。本発表では、館に閉じ込められた人々が古代ギリ

シャのどの神の属性を与られているのか、次々起こる不思議な現象や謎の死の意味は何か、など推理小説的な側面も検討しつつ、揺らぐアイデンティティや多層的時空間にベルギー的なるものを見ていくことになる。

なおジャン・レーはオランダ語でも多数の作品を執筆している。ベルギーの多言語作家として紹介すべく、『ジャン・レー／ジョン・フランダース幻想作品集』（『マルペルチュイ』、短編集『恐怖の輪』、オランダ語短編集『四次元 幻想物語集』所収）の邦訳をまもなく出版予定である。

Loi pandémie の制定について

武居一正（福岡大学）

ベルギーにコロナが蔓延してから1年以上経ちますが、この間政府は主に内務大臣のアレテ（政令）によって、外出禁止などの蔓延防止策を取ってきました。この措置は様々な人権制限を伴うものでした。およそ去年の秋頃から、人権制限をするならば、大臣のアレテは国会での審議対象ではないので、きちんとした法的根拠および民主的正統性が必要との批判が出始め、実際訴訟にもなり、一審では政府が負けるという事態になりました（直ちに控訴）。政府も、暫く前から各界からの意見具申や批判を受け、蔓延防止措置の根拠法制定の準備をし、現在下院内務委員会で審議中です。早ければ来週にも本会議可決が見込まれます。このいわゆるコロナ法の制定理由や内容などについて簡潔に御説明したいと思います。

2020 年度

2020 年度に開催した 4 回の研究会はすべてオンラインでの開催となりました。また、12 月に開催が予定されていた第 3 回「ベルギー学」シンポジウムは新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行のため延期となりました。

第 86 回研究会

日時 2021 年 2 月 6 日 (土) 17:00-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 宮内悠輔「1990 年代ベルギーから見た地域主義政党間の政策競合」

【発表】 山内瑛生「現代ベルギー作家のオートフィクションに見るブリュッセル表象——ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』を中心に」

1990 年代ベルギーから見た地域主義政党間の政策競合

宮内悠輔（立教大学大学院博士課程後期課程）

本報告では、報告者の執筆論文「ベルギー地域主義政党の政策転換——ウェッジ・イシュー政策の帰結」（既刊、『年報政治学』2020-II 号所収）の内容を紹介する。同論文は、1990 年代後半のベルギーにおける地域主義政党間の政策競合について検討した。報告者は、検討事例となる地域主義政党「ヴォルクスユニ」(VU) が排外主義を“採用しなかった”ことに着目し、その要因の解明を試みた。VU が得票最大化をねらって排外主義に転ずることができなかった最大の理由として、報告者は、最大の競合者たる政党「フラームス・ブロック」(VB) の政策が VU の政策方針を硬直させたと論ずる。反移民の主張を前面に押し出す地域主義政党 VB の政策は、他党の政策的な一貫性を分断する「ウェッジ (楔) ・イシュー」として機能したのである。

現代ベルギー作家のオートフィクションに見るブリュッセル表象——ピエール・メルテンス『王の平和』とジャン・ムノ『ブラバントの英雄の忌むべき物語』を中心に

山内瑛生（東京大学大学院博士課程）

「オートフィクション (autofiction)」は、20 世紀後半以降のフランス文学において注目を浴びてきた文学ジャンルである。「自伝 (autobiographie)」と「フィクション (fiction)」の境界を揺さぶるこのジャンルは、ピエール・メルテンス (1939-) 『王の平和』やジャン・ムノ (1924-1988) 『ブラバントの英雄の忌むべき物語』を中心に、現代ベルギーのフランス語文学にも見ることができる。ブリュッセル出身の両小説家の作品に共通するのは、一般的な「自伝」における語りや人称のあり方を意図的に崩す作業を通じて、ベルギー人（あるいはブリュッセル人）のアイデンティティにかかわる諸問題を浮き彫りにしている点だ。両作品を「オートフィクシ

ョン」として読み直すことにより、現代ベルギーのフランス語文学に見られるベルギー・アイデンティティや

ブリュッセルのイメージの諸相を明らかにできるだろう。

第 85 回研究会

日時 2020 年 12 月 12 日 (土) 17:00-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 永井友梨「フェリシアン・ロップス美術館における展覧会の特有性」

【発表】 岡本夢子「リエージュからローカル愛を込めて *Bons baisers ardents de Liège*」

フェリシアン・ロップス美術館における展覧会の特有性

永井友梨 (リエージュ大学博士課程)

この発表では、ナミュールにあるフェリシアン・ロップス美術館におけるこれまでの展覧会を振り返りたい。この美術館はフェリシアン・ロップスの生家のすぐそばに位置する比較的小規模でアットホームな美術館である。年に3回ほどロップスに関連する展覧会が開かれ、多様な視点からロップスとその周辺を考察している。しかし、美術館自体も各展覧会の内容も非常に質の高いものであるが、日本における知名度が低いことは残念である。ロップスを軸に据えているだけに、この美術館ならではの個性的な展覧会が多く、日本では開催されないようなマニアックな主題のものもしばしばある。本発表では、発表者が実際に訪れた三つの展覧会 (1. *Zwanze, Fantaisie et burlesque – De Louis Ghémar à James Ensor*, 2. *Henry de Groux, Maître de la Dèmesure*, 3. *Henri de Braekeleer. Fenêtre ouverte sur la modernité*) と、過去に行われた二つの展覧会 (1. *Félicien Rops Auguste Rodin. Les embrassements humains*, 2. *Impressions symbolistes Edmond Deman, éditeur d'art*) について紹介する。とりわけ、2018年に開催された *Zwanze* 展では発表者の専攻するジェームズ・アンソールが大

きく扱われており、この点に関しては重点的に述べる。

リエージュからローカル愛を込めて *Bons baisers ardents de Liège*

岡本夢子 (リエージュ大学・東京大学
日本学術振興会特別研究員 PD)

『ベルギー人になる方法』というバンド・デシネはあっても、そもそも「ベルギー人」とは何かという問題に答えを出すことは容易ではない。この複雑なアイデンティティの問題は私たちを当惑させつつ魅了し続けている。そこで今回は、ベルギー南部ワロン地方最大の都市、リエージュに焦点をあて、局地的な規模でのベルギー人のアイデンティティを検討してみたい。ジャン＝マリー・クリンケンベルグとローラン・デムーラン共著の『リエージュ小神話集』(*Petites mythologies liégeoises*)を中心に、お祭り、地ビール、移動遊園地、名物、アクセント、リエージュ言葉、などについてのエピソードを読み、写真や動画を使って解説していく。今回の「リエージュとは何か?」という発表を通して、リエージュを紹介するとともに、「ベルギー人」というアマルガムの一要素の理解につながれば幸いである。

第 84 回研究会

日時 2020 年 10 月 17 日 (土) 17:00-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 佐藤孝彦「ベルギーにおける#Blacklivesmatter とコンゴ系コミュニティの動き」

ベルギーにおける#Blacklivesmatter とコンゴ系コミュニティの動き

佐藤孝彦 (神戸大学大学院)

昨今、世界各地で行われている“#Blacklivesmatter”アクションに関連したベルギー国内の動きを取り上げて

いく。ブリュッセルでの人種差別抗議デモ (2020 年 6 月 8 日) に続いて、公共の場に造られたレオポルト 2 世像 (胸像) への放火や落書き、オンライン署名活動によるレオポルト 2 世像の撤去要請等、ベルギー特有の動きが見受けられる。このような社会の動きは、今年

(2020年)がコンゴ独立60周年という節目の年であることも相まって、コンゴ系コミュニティで顕著になっているように見える。今回の報告では、コンゴ系コミ

ュニティならびにベルギー政府の動きに焦点を当てながら、ベルギーの#Blacklivesmatterを考察していく。

第83回研究会

日時 2020年7月25日(土) 17:00-19:00

会場 オンライン開催

【発表】 平岡直樹「ブリュッセルのモン・デザール公園の都市軸とヴィスタについて」

ブリュッセルのモン・デザール公園の都市軸とヴィスタについて

平岡直樹 (南九州大学)

ブリュッセル中心部のモン・デザール公園を取り上げ、19世紀以降の9計画案を考察した。そして実施案のフランス整形形式庭園の技術を用いた公園整備による都市軸やヴィスタの形成過程とその特徴、さらにヴィスタの形成に効果的な庭園技術を考察した。その結果、庭園や広場等の位置づけが次第に高まって行く過程が明らかになった。また、実施案のペシエルの計画では、

大平面を安定して見せるための傾斜角や、斜め上から見ることを想定した平面計画等、整形形式庭園の視覚補正の技術を積極的に適用していることがわかった。また公園上部の振り分け階段上の眺望テラスから庭園や街並みを俯瞰する構成は、庭園全体を高所から軸線上に眺望する整形形式庭園の基本的構成の都市空間へ応用であることがわかった。さらに都市軸について、本公園整備により形成され強調された軸線が、実際の道路整備を伴わない視覚上の軸性を形成する機能を果たしていることが明らかになった。

西宮、平塚、信楽、そしてブリュッセルと4回の研究会を実施しました。3月のブリュッセル大会は、ベルギーでは2月4日の感染者の初確認、日本では3月2日からの一斉休校の要請と、コロナ「禍」へと向かう空気のなかでの開催でした。

第82回研究会 ブリュッセル大会

日時 2020年3月6日(金) 13:30-18:00

会場 神戸大学ブリュッセルオフィス

【発表】 中條健志「19世紀ベルギーにおけるフランス移民」

【発表】 松井真之介「フランス語圏におけるアッシリア人ディアスポラ」

【発表】 佐藤孝彦「ベルギーにおけるコンゴ系ディアスポラとマトング 現代の様相」

【発表】 山内瑛生「ピエール・メルテンス『避難場所(Terre d'asile)』におけるブリュッセル表象」

【発表】 小田藍生「アール・ヌーヴォーの誕生——ヴィクトール・オルタの建築商業化への抵抗」

【発表】 永井友梨「ジェームズ・アンソールとフェリシアン・ロップスにおける日本美術からの影響について」

19世紀ベルギーにおけるフランス移民

中條健志 (東海大学)

本報告では、19世紀のベルギーにおけるフランス移民をとりあげ、彼(女)らがどのようなコンテキストのなかでベルギーに移住し、定住していったのかを明ら

かにする。この時期は、移民受け入れよりも、むしろ送出国としての側面が強かったベルギーであるが、そうしたなかでも、フランスからの移住者は一定数存在していた。そこには、地理的に近接しているという理由の他に、政治的な事情と、文化(活動)の実践という二

つの背景があった。報告のなかでは、それらの事例を紹介しながら、建国直後のベルギーにおいて「フランス人」のプレゼンスが高まっていくプロセスについて論じる。

フランス語圏におけるアッシリア人ディアスポラ

松井真之介 (神戸大学)

近年、ダーイシュ (IS) による迫害や居住地の爆撃によって皮肉にも注目を浴びつつあるアッシリア人 (カルデア人) に関して、フランスのパリ郊外やベルギーのメヘレンにおける現地調査の成果を中心に報告を行う。まずアッシリア人とは誰か、アッシリア人がたどってきた歴史はいかなるものか、1915 年のアッシリア人「ジェノサイド」とはいかなるものか、アッシリア人の宗教はどのようなものか、そして度重なる迫害によってディアスポラとなった彼らは離散先で周囲からどのように「見られている」のか、アルメニア人ディアスポラと比較しつつ明らかにする。その後アッシリア人ディアスポラのコミュニティが現在どのような状況にあるのかを、パリ郊外とメヘレンのコミュニティに関する調査報告を中心に論じる。

ベルギーにおけるコンゴ系ディアスポラとマトンゲ現代の様相

佐藤孝彦 (神戸大学)

イクセルにあるマトンゲ (Matonge) 地区は、1970 年代から 80 年代に「コンゴ人街」として栄えていた。ベルギー国内外問わず、ブリュッセルに来たら必ずコンゴ人が「通る」場所であった一方で、時代の変遷と共に、この場所を行き交う人々はコンゴ人をはじめとするアフリカ系に加え、インド・パキスタン系移民のプレゼンスも強くなり、当地区の風景は多様化している。今回の調査では、長年マトンゲに通ってきた、あるいは商売を営んできたコンゴ系ディアスポラ、さらにベルギーで生まれ育った若い世代にインタビューを行い、これまでのマトンゲの変遷と現状、さらには現代ベルギー社会においてコンゴ系ディアスポラが直面している問題等、当事者の声を聞いているところである。加えて今回の発表では、近年のベルギー社会における「脱植民地化 (décolonisation)」の動きについても具体的な事例を挙げながら言及する。

ピエール・メルテンス『亡命地 (Terre d'asile)』におけるブリュッセル表象

山内瑛生 (東京大学)

現代ベルギーのフランス語圏文学を代表する作家ピエール・メルテンスは、自らの出身地であるブリュッセルをしばしば作品の舞台に選んできた。デビュー当初から「歴史 (l'Histoire)」と「フィクション」の狭間の領域に焦点を当てて来たこの小説家は、1978 年発表の長編『亡命地』において、このテーマとブリュッセルという都市のトポスを結びつけている。チリの軍事政権を逃れブリュッセルに亡命した主人公は、自身の受けた苦難に対するブリュッセルの人々の無理解に違和感を覚え、徐々に神経を擦り減らしていく。ここで露わになるのは、「歴史」から切り離されている国であるがゆえに、それを「概念」としてしか捉えられないベルギー人の姿だ。だが、作者はこうしたベルギー社会の病弊を理解したうえで、なおも「フィクション」を通じて、ベルギーの統一的表象の再現を目論んでいるのである。『眩暈』や『王の平和』といったメルテンスの主要作品を構成するベルギー・イメージを最初に明確化した小説として、『亡命地』を読み直すことが可能だろう。

アール・ヌーヴォーの誕生——ヴィクトール・オルタの建築商業化への抵抗

小田藍生 (ブリュッセル自由大学)

ヴィクトール・オルタは、19 世紀末に流行したアール・ヌーヴォー建築の先駆者である。彼の偉業は、単にアール・ヌーヴォーの傑作である都市の住宅群を設計した点にとどまらず、インテリアデザイナーとしての手腕にもある。彼は住まいを芸術的な空間にしようと、建築金物から家具まで総合的に手掛けた。前回の発表では、彼が既製品に満足せず、商業的な室内装飾のあり方に疑問を持っていたことを指摘した。

19 世紀末、ベルギーはイギリスに次ぐ産業先進地であったため、現代のベルギーでは産業・商業の発展をテーマとした博物館が数・内容ともに充実している。例えば、ブリュッセルの La Fonderie やシャルルロワの Le Bois du Cazier がある。2003 年には、ブリュッセル王立美術・歴史博物館で 19 世紀の装飾芸術の産業化をテーマにしたシンポジウムが開催され、花瓶や置物などの製造・販売に関する研究成果が報告されている。

しかし、アール・ヌーヴォー建築が誕生した背景を考える上で重要な内装材や家具に関する具体的な研究はほとんどなく、当時の建築家が一般的な住宅を建てる際、どこまで自らで設計する必要があったのか知られていない。本研究は、オルタが抱いた室内装飾の商業化に対する問題意識を理解する手がかりの一つとして、19 世紀後半から 20 世紀初頭に内装材や家具を生



産していた会社の製品カタログ、建築雑誌の記事や広告を調査し、建築分野の産業・商業化の様子を具体的に明らかにする。そして、この流れに抵抗して自らの芸術を確立したオルタの取り組みを見ていく。

ジェームズ・アンソールとフェリシアン・ロップスにおける日本美術からの影響について

永井友梨 (リエージュ大学)

ジェームズ・アンソールと日本美術との関連性を紐解くことは容易ではない。なぜなら、アンソールが日本ならびに日本美術について殆ど言及していないからだ。これは、アンソールの先輩画家フェリシアン・ロ



ップスにも共通している。しかし、彼らは決して日本美術に無関心だったわけではない。アンソールもロップスも日本美術(浮世絵、読本、春画など)からモチーフや構図、人体の動き等を吸収し、自身の作品の中で応用している。アンソールのジャポニズムを研究する上で、この画家が日本美術について無知だったのか、それともあえて沈黙を貫いたのかを解明することは極めて重要である。

本発表では、アンソールとロップスとを照合しながら、なぜ両者が日本美術について多くを語らなかったのかを探るとともに、日本美術から着想を得たと思われる作品について考察する。

第 81 回研究会

日時 2019年9月21日(土) 14:00-17:30

会場 信楽伝統産業会館内 研修室

【発表】 石部尚登「ベルギーの移民政策と言語政策」

【発表】 中條健志「ベルギー移民史年表の検討」

ベルギーの移民政策と言語政策

石部尚登 (日本大学)

ベルギーの移民政策は、2016年のベルギー連続爆破テロ事件後は特に、その「不備」が指摘される。一方、たとえば移民統合政策指数 MIPEX では 38 カ国中 7 位に位置付けられるなど、肯定的な評価がなされることもある。本報告では、こうした両極端な評価がなされ得るベルギーの移民政策の実態を、制度的な側面から明らかにすることを目的に、その移民(統合)政策、とりわけ言語に関する政策に焦点を当てて検討する。

具体的な手順としては、まずは近年のヨーロッパ諸国の移民政策における「言語要件」の利用に着目して、そこに見られるいくつかの共通のトレンドを確認する。その後、現在のベルギーの連邦制度の下で移民政策の

権限を有する複数の政策主体を整理した上で、それぞれの政策主体ごとに、20世紀の後半以降に行われてき



た移民(統合)政策を言語的な観点から分析する。

ベルギー移民史年表の検討

中條健志(東海大学)

現在、本研究会会員を中心に「ベルギーの『移民』社会と文化」をテーマとした論文集の刊行が準備されて

おり、そのなかで報告者は、ベルギー移民史年表——建国からこんにちまでのもの——の執筆を担当している。本報告では、歴史学、社会学の先行研究をベースに報告者が作成した年表をたたき台とし、参加者間の議論を通じて、より多くの研究分野からの考察や知見を加えてそれを完成させたい。

第 80 回研究会

日時 2019年7月27日(土) 14:00-17:30

会場 東海大学湘南キャンパス 1号館2階 1B-205 教室

【発表】 山口博史「『ベルギー大使の見た戦前日本』の再読：災害研究の視点から」

【発表】 正木裕子「近年のベルギー国内における音楽公演と異文化の影響」

【発表】 吹田映子「描かれた「移民」——ウージェーヌ・ラールマンズ(1864-1940)の三連画をめぐる」

『ベルギー大使の見た戦前日本』の再読：災害研究の視点から

山口博史(都留文科大学)

『ベルギー大使の見た戦前日本』(アルベール・ド・バツソソピエール(著)、磯見辰典(訳)、2016年、講談社学術文庫)は1920年代から30年代にかけての日本を、外交官の立場から活写した回想録である。当時の世相のみならず、著者と交流のあった人びとの様子がエピソードを交えて描かれている。その中でとりわけ注目に値するのが、著者本人が逗子滞在中に遭遇した関東大震災に関する記述である。今回の報告では、同書再読の試みを災害研究の観点から行なってみたい。この試みをベルギー研究から災害研究への貢献を行なうための第一歩としたい。

近年のベルギー国内における音楽公演と異文化の影響

正木裕子(声楽家)

ローリングストーンズが4000年の歴史を持つモロッコ山岳地の伝統音楽を取り入れてアルバム「大陸移動説」(Continental Drift)を作成したのは1989年であった。その後、1990年代になると各国のCD店に今まで分類ができなかったジャンルの音楽のために堂々とワールドミュージックのコーナーが設けられるようになる。丁度そのころ、ブリュッセルでも、スイスの例に倣って異文化音楽祭ルールカフェ(Couleur Café)の前身が誕生していた。それから30年余りを経て今や、アフリカ、南東ヨーロッパ、ラテンアメリカの音楽は、ベルギーの音楽公演に欠かせない要素となっている。ここでは、2018年のベルギー人口統計において移民国人

口の上位を占めているモロッコとルーマニアをとりあげ、その音楽文化統合の状況を比較し、それぞれの特徴を見出した。この考察は、外部から異文化を受け入れる立場ではなく、移民としてベルギーの音楽文化に統合を目指すものとしての視点で行ったものである。

描かれた「移民」——ウージェーヌ・ラールマンズ(1864-1940)の三連画をめぐる

吹田映子(自治医科大学)

アントウェルペン王立美術館にある三連画の《移民》はブリュッセル在住の画家ウージェーヌ・ラールマンズにより1896年に制作された。原題は*Les Emigrants*、ある村の人々が集団で故郷を離れ、港へ押し寄せるといった経緯が三つの場面を通して描かれている。この絵はジョルジュ・エークハウトの小説『新カルタゴ』(1888-1893)に想を得たものだが、エークハウトが取材したのは当時のベルギーの社会的な現実、つまり飢饉や失業によって多くの人々が生活困難になり、残された希望としてアントウェルペン港に向かい、そこから蒸気船でアメリカ大陸へ渡ったという事実である。ラールマンズはブルジョワ階級として生涯をモレンベーク地区で過ごしたが、工業化によってそこから急速に失われつつあった郊外の自然風景に画題を求め一方、同じ工業化により貧困化を余儀なくさせられた労働者たちがデモやストライキに一縷の望みを託す姿を描いた。ラールマンズに一貫した関心の対象は、都市の近代化によって場所を追われた者たちにあったと言える。

第 79 回研究会

日時 2019 年 5 月 12 日 (日) 13:15-17:30

会場 西宮市大学交流センター講義室 1

【発表】 山口博史・神原ゆうこ「境界変動がもたらすインパクトを考える：ベルギーとスロヴァキアの比較から」

【発表】 中條健志「ベルギー移民史——建国から現代まで」

【発表】 ルート・ヴァンバーレン「「市民化」を促す語学教育」

【発表】 井内千紗「多文化都市ブリュッセルと向き合う「フラーンデレン」の舞台芸術」

【発表】 岩本和子「ケナン・ゴルグン Kenan Görgün の表象における多層的アイデンティティと当事者性」

境界変動がもたらすインパクトを考える：ベルギーとスロヴァキアの比較から

山口博史 (都留文科大学)・

神原ゆうこ (北九州市立大学)

20 世紀に入ってから国内で行政的境界の変動を経験してきた国々がある。この報告ではそうした国々の中からベルギーとスロヴァキアを取り上げる。両国をとりまく状況の違いと類似性に注目し、行政的境界の変動を住民の視点からとらえなおすことの意味を考える。ネーション・ステイト別の分析に加え、比較の視点を持ち込むことでどういった問題系が開かれるか参加者ととも考えてみたい。

ベルギー移民史——建国から現代まで

中條健志 (東海大学)

本報告では、建国から現代にいたるまでのベルギー移民史を概観する。ここでの「移民」とは、immigration すなわち国外からベルギーへの移住者ならびにその後裔を指す。そこでは、時代を 19 世紀 (建国と受入国家への展開)、20 世紀前半 (経済危機と戦間期における受入制限)、20 世紀後半 (経済成長期と定住化) の 3 つに分け、移民政策をめぐる政治言説の変遷とともに、彼らがベルギーにおいてどのような存在とみなされてきたのかを明らかにする。

「市民化」を促す語学教育

ルート・ヴァンバーレン (筑波大学)

改正出入国管理法によって 2019 年の春に在留資格「特定技能」が新設され、日本の移民政策が大きく動くはずである。全国レベルや地方レベルに関わらず、行政にとって受け入れ態勢や就職先確保のほか懸念となる課題の 1 つは日本語教育であろう。すでに 1 世紀前後の移民受け入れ歴史を持つベルギーが語学教育を

どの目標を持ってどのように行っているか本発表で紹介する。21 世紀の今、移民がベルギー社会に統合できるように語学教育が不可欠だとされるが、その背景にある移民の歴史とその多様化についてまず概観する。次にベルギー北部のフラーンデレン地域において実施されている統合および市民化対策を説明する。さらにオランダ語教育に焦点を当て 2019 年現在実施されているプログラムや対象者についてまとめる。最後に「市民化」やそのために実施されている語学プログラムに見られる課題について考察を加える。

多文化都市ブリュッセルと向き合う「フラーンデレン」の舞台芸術

井内千紗 (国際短期大学)

フラーンデレン運動の歴史において重要な文化的・政治的意味を有する 1877 年設立の王立フラーンデレン劇場 (Koninklijke Vlaamse Schouwburg、以下 KVS と表記) は、ナショナリズムを象徴する文化装置として、またオランダ語話者の社交の場として、確固たる地位を築いてきた。そのような歴史を経て、KVS は 1990 年代以降、「ブリュッセルの現実」と向き合うことにより、アイデンティティの拠りどころである「フラーンデレン」と、ブリュッセルを取り巻く文化の多様性や社会環境を融合させ、新境地を切り開くことに成功している。本発表では KVS が改革にあたって実施した文化マネジメント、プロジェクト、およびレパートリー作品に着目し、多文化都市ブリュッセルを意識した表現活動において、ベルギーおよびフラーンデレンの歴史が逆説的に作用していることを示す。

ケナン・ゴルグン Kenan Görgün の表象における多層的アイデンティティと当事者性

岩本和子 (神戸大学)

ベルギーの移民史と連動したいわゆる「移民文学」の存在を確認した上で、現在最も注目し紹介したいトルコ移民2世のフランス語作家ケナン・ゴルグン Kenan Görgün (1977-) の『*J'habite un pays fantôme* 幻の国に住む (仮訳)』を取り上げる。2014年に相次いで出版された他の3著作 *Aanatolia Rhapsody*, *Rebellion Park*, (ほぼ同タイトルの) *J'habite un pays-fantôme* をもとにした戯曲であり、それを作家本人が主役の一人として演じる

という、当事者性、身体性との関わりも持つ集大成的な作品である。その分析を通して、「他者化」される移民出身者の多層的アイデンティティの問題や、「書くこと」により自己の根源を探求することの意味などを考察する。また彼を含めジャンルを越えて活躍する移民系作家たちの活動と「ベルギー性」との関係を考えておきたい。

第79回	2019年5月12日	西宮市大学交流センター
第80回	2019年7月27日	東海大学
第81回	2019年9月21日	信楽伝統産業会館
第82回	2020年3月6日	神戸大学ブリュッセルオフィス
第83回	2020年7月25日	オンライン
第84回	2020年10月17日	オンライン
第85回	2020年12月12日	オンライン
第86回	2021年2月6日	オンライン
第87回	2021年5月29日	オンライン
第88回	2021年7月31日	オンライン
第89回	2021年9月18日	オンライン
第90回	2022年5月28日	オンライン
第91回	2022年7月24日	明治大学
第92回	2022年9月24日	南九州大学
第93回	2023年3月10日	ブリュッセル自由大学
第94回	2023年5月13日	西宮市大学交流センター
第95回	2023年7月22日	拓殖大学
第96回	2023年9月23日	徳島大学



ジェームズ・アンソール没後 75 年

永井友梨

100 ベルギーフラン紙幣の顔ともなった画家ジェームズ・アンソール(1860-1949)が没してから、来る2024年で75年が経とうとしている。本国ベルギーのオステンド(画家の故郷)、アントワープ(アントワープ王立美術館はアンソール作品所蔵数世界一)、そしてブリュッセルではこれを記念した展覧会が多数企画されているので、ベルギーに赴く予定がある方は是非足を運んでいただきたい。

そうは言うものの、アンソールは所謂、「万人受け」する芸術家ではない。視覚的な甘美さのある印象派風の作品もあるが、アンソールのアイデンティティをそうたらしめている代表作は、原色を多用し厚塗りで描かれた仮面と骸骨たちである。アントワープ王立美術館のヘルウィッグ・トッツ氏が「アン

ソールはカルト的な人気がある」と指摘するように、つまりそれは俗な言い方になるが、「刺さる」人には「刺さる」ということだろう。かく言う筆者も「刺さった」一人で、高校生の頃初めて訪れたアンソール展は人生の転機であった。

その頃はアンソールに関する知識など何も無かったが、どれも派手で明るい色彩でおかしみをもって描かれているのに、言いしれない空虚さはどこから来るのだろうと不思議に思いながら帰路についた。

当時は、アンソール研究のためにベルギーに6年も留学するとは夢にも思わなかったが、ベルギー研究会の皆様とのご縁を繋いでくれたアンソールには、この場を借りて感謝したい。

セザール・フランク 生誕 200 周年の節目に寄せて

斎藤 至

セザール・フランク(1822-1890)は、フランス近代音楽の楽統を受け継ぎ、また敬虔な教会オルガニストとしての内面性と奏楽経験に裏付けられたピアノ作品を遺している。本稿では筆者が研究会にて行った二回の話提供(*)を要約・再掲し、拙いながらその意味と魅力を振り返りたい。

ベルギー音楽史上の位置

音楽学者・音楽評論家の平尾貴四男は「18世紀に生まれ、18世紀に死んだフランスの作曲家の中で、最も偉大な名は、ベルリオーズ、フランク、ビゼーの三人である」と評価する。だが作曲家としてのフランクはオルガニストや教育者としての顔に比べると、知名度は高くない。

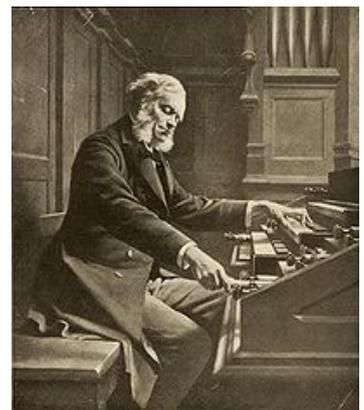
その要因は、時の流行と一線を画した作風にある。フランクはJ. S. バッハの作品を深く研究し、門下生にも対位法を重視して講義したのみならず、大ク

プランなどフランス・バロック音楽の美しい語法を尊重し、自作に反映した。

《白鳥》などで知られるサン＝サーンスも《ラモー全集》を編纂するなど(大迫&安川 2019)、前時代の楽統に精通していた。こうして、同時代

のドイツ・ロマン派の音楽表現に学んだ厳格な書法、「循環形式」の巧みな使用で、フランクはサン＝サーンスらと共に、フェティスやブノワなど、同時代の音楽専門家から「savant(学識深い)」「sévère(厳しい)」一派として、確固たる評価を得た。

また折しも、フランクの活躍した19世紀中後半



聖クロチルド教会のオルガンを弾くフランク

のフランスは「フランス革命」からの芸術的復興が目指され、カヴァイエ=コルなどの名工が出現し、全土のパイプオルガン修復が大いに推進されたという。この「フランス・オルガン音楽の再興期」に、彼はサン=サーンスと両翼を成す重要な音楽家の一人であり、「フランキスト」と呼ばれる多くの弟子を育てた。

注目の作品を取り上げた貴重な公演

「セザール・フランク生誕200年メモリアル・オルガンコンサート」(2022年2月19日)は、ミュゼ川崎シンフォニーホールのホールアドバイザーを務める松居直美の企画。フランクゆかりの三部構成からなり、第1部で「フランスのオルガン音楽の系譜」で、その伝統の中における存在意義・偉大さを確かめ(梅干野安未)、第2部で同時代の「ドイツ・ロマン派音楽」からの影響を受けた大作を取り上げ(廣江理枝)、第3部でロマン派の音楽家にとって必修の存在であったJ.S. バッハへと繋げる(松居直美)、という包括的な内容で、総4時間近くに及んだ。

ほかには、有名なヴァイオリンソナタなどを取り上げた「フランクの室内楽『東京・春・音楽祭』公演(2023年4月9日)などが出色であった(筆者はオンラインによる配信で視聴)。また筆者は現地へ聴き

に行けなかったものの、京都コンサートホールでの生誕200年三連続企画も意義深いものと思われた。

(*) 第88回(オンライン)2021年7月31日、第90回(オンライン)2022年5月28日の各回。

文献

- 大迫千佳子&安川智子 2019.「ベルギーのフェティス、フランスのフェティス」日本音楽学会東日本支部横断企画シンポジウム、2019年12月14日。
- 小川有紀 1999.「フランス・オルガン音楽の再興—19世紀中葉、世俗化に直面して」<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3157091>



ミュゼ川崎公演のパナー

フランス・マゼレールを忘れてはならない

吹田映子

フランス・マゼレール(Frans Mascreel, 1889-1972)のことを知っている人は現在の日本にどれくらいいるのだろうか。私とマゼレールとの気づかぬ出会いは、学部生の頃に受けたフランス語の授業で起きていた。教材はロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』(蛭原徳夫編、第三書房、1977年初版)で、私が不真面目だったせいかな本文の記憶はないものの、その扉絵だけは強烈に印象に残っていた。背伸びをし、大きな窓ガラスに両手をつけて外の景色に見入る少年の後ろ姿。窓の向こうでは雄大な川が蛇行しつつ少年の眼下を流れている。黒と白だけの一見単純に見える木版画でありながら、少年の足元で軋む床板や、

水嵩を増した川の圧倒的な流れ、薄暗い室内で心細げながらも逞しい生命力を宿した少年の様子などが生き生きと感じられる。そこに暗示されているのは少年と川を結びつける運命のようなもの。当時の教材を確認してみたが、この扉絵の作者名は記載されていない。それがマゼレールによるものだと知ったのは、この最初の出会いから20年ほど経った、つい最近のことである(*)。

マゼレールはベルギー出身の版画家だ。1889年7月30日に北海沿岸のブランケンベルヘで生まれ、5歳で父親を亡くすと、母親の再婚に伴ってヘントでの暮らしを始める。新しい父親は社会主義の立場を

とる医者であり、マゼレールはその政治的な薫陶を受けながらブルジョワ家庭の長男として育つ。17歳でヘントの王立美術学校に入学。在学中、既存の教育システムが彼に合わないことを理解した教員（当時学長でもあった画家のジャン・デルヴァン）から旅をするよう勧められると、その言葉に従うかのように、マゼレールの以後の人生は旅の様相を呈することになる。同じ頃、マゼレールはヘントの版画家ジュール・ド・ブリュイケと知り合い、20ほど年上の彼から版画の技法を始め多くを学ぶ。また、20歳の頃には後に妻となるポーリーヌ・インホフと出会い、彼女の娘を加えた三人でパリに移って新生活を始める。パリでは、詩人から政治家まで様々な知識人と知り合いになり、彼らとの交流を通して、みずからも芸術家として政治参加してゆく方向に進む。翌年はチュニジアを訪れ、異文化体験が深い意味を持ったのであろう、そのまま一年ほど滞在して絵に没頭した。1914年夏、ポーリーヌとブルターニュで休暇を過ごしていたところ、フランスがドイツと開戦することになり、二人で戦火を逃れながらパリまで歩いて帰る。それからベルギーに戻ったものの、身を落ち着けた先のデンデルモンデ（オースト＝フランダレン州）では、侵攻してきたドイツ軍によって街が破壊されるのを目の当たりにする。この街でマゼレールは編集者のロラン・ド・マレスと知り合い、彼が手がけた『芸術家たちを通じた第一次世界大戦』（著名な美術批評家であるギュスターヴ・ジェフロワを介してフランスで出版）や『侵略されたベルギー』（1915年）に作品が掲載される。

さて、マゼレールは再び戦火を逃れるべく、パリで知り合っていた社会主義運動家のアンリ・ギルポーを頼って一家でジュネーヴに移住する。そこでは国際赤十字のボランティアとなり、戦争捕虜たちがフラマン語で書いた手紙をフランス語に翻訳する任務についた。スイスでは、ロマン・ロランやシュテファン・ツヴァイクら国際反戦運動に熱心な作家たちと知り合いになる。この時期のマゼレールはとりわけ多産で、仲間と雑誌を創って反戦をテーマにした挿絵を発表したり、エミール・ヴェラーレンの詩集に挿絵をつけたり、チューリッヒの画廊で展覧会を行うなどしている。1918年には、版画の連続による無文字の物語『ある男の受難についての 25 の図

像』を自費出版する。これは新しい芸術形式としての最初の無声小説とみなされ、ドイツ表現主義だけでなく、当時最も人気のあった無声映画からも影響を受けていることが指摘されている。このように盛んな活動と反比例して、マゼレールの家計は傾き始め、スイスでは慎ましい暮らしを送った。

戦後、二番目の無声小説となる『わが時の書』（1919年）を自費出版すると、自伝的要素を持つこの作品は批評家の間で評判になり、リルケやトーマス・マンなど著名な作家たちに注目される。当時11歳でリルケのそばにいたバルテュスもまた、その影響を受けて『ミツ』を制作した。1920年にはミュンヘンの出版社クルト・ヴォルフが『わが時の書』のドイツ語版を出し、以後この出版社からマゼレールの挿絵や画集がしばしば世に送り出される。以後数年間、マゼレールはジャーナリズムのために定期的な仕事をしながら無声小説を多数出版し、成功の礎を築く。家庭ではポーリーヌの娘が成人して家を出ることになり、残された二人はマゼレールが32歳を迎える1921年に結婚する。翌年二人は再びパリに転居し、モンマルトルで暮らし始める。そのうちにドイツの画商アルフレッド・フレヒトハイムに作品を気に入られると、この画商の采配でドイツを始めヨーロッパ各地で展覧会を開くことになる。パリでのマゼレールは、芸術家や作家たちとの旺盛な付き合いの傍ら、ポーリーヌとの仲を新たに深めていった。二人は、地図上イギリスに手を伸ばせば届きそうなフランス沿岸の都市ブローニュ＝シュル＝メールで夏を過ごすのを好み、1925年には経済的な成功のおかげで、そこに程近い漁村に休暇用の家を買うことができた。36歳を迎える年である。

その頃、マゼレールはパリのアルバン・ミシェル社が準備していた『ジャン・クリストフ』（1925-1927年）の挿絵制作に当たっており、全5巻の小説のために666点という膨大な数の木版画を制作。並行して、ベルギーの作家シャルル・ド・コステルによる『ウーレンシュピーゲルとラム・フッドザックの物語』全2巻（1926年にクルト・ヴォルフ社が出したドイツ語版）のために167点の挿絵を制作した。数年後、世界情勢としては1929年に株価が暴落。実質、以後10年間「大恐慌」が続く。日頃ドイツを頻繁に訪れていたマゼレールは当地の政変を目の当た

りにし、ナチス党の躍進に強烈な不安を感じていた。1932年にはアムステルダムで行われた反ファシズム国際大会に参加。1935年には展覧会への出品に際してソビエトに招かれ、モスクワやトビリシを訪問。その折にかどうかは不明だが、ロランの計らいでマクシム・ゴーリキーと会う予定だったマゼレールは、その直前にゴーリキーが死去したため(1936年6月)、臨終の床に横たわる彼をスケッチすることになった。ひと月後にはスペインで内乱が勃発。芸術家や知識人から成るグループに加わってマゼレールも戦地に赴き、共和国政府への連帯を表明する。翌年パリで開かれた万博では、親交のあったパブロ・ピカソがスペイン館のために制作した《ゲルニカ》が公開。同年、マゼレールはパリでベルトルト・ブレヒトの手伝いをし、『第三帝国の恐怖と悲惨』の初演に関わった。

1940年6月にパリが占領されると、マゼレール夫妻はアヴィニョンへ向かう。南仏が侵攻の対象となるまでの間そこに留まったが、マゼレールは戦闘的左翼であることを知られていたため、二人とも身元を偽って生活せざるを得なかった。最終的にはフランス南西部の小村に辿り着き、それ以上の行き場を失った二人は、荒廃した城の中に身を隠した。

戦後、1947年には友人の画家ハーマン・ヘンリー・ゴワが用意してくれたポストに就き、ドイツのザールブリュッケンにある美術学校で教鞭をとり始める。翌48年、戦後初の展覧会をマンハイムで行う。60歳を迎える1949年に、マゼレール夫妻はニースの旧港に面したアパルトマンに転居。翌年参加したヴェネツィア・ビエンナーレでは版画賞を受賞。これを受けてその翌年には、郷里のヘント美術館を含め世界各地の美術館で展覧会を開催。その後も世界各地を飛び回り、70歳に近づいた1958年には中華人民共和国から招待され、北京、上海、武漢を巡回した展覧会に合わせて訪中。この年は毛沢東率いる中国共産党が「大躍進政策」を打ち出した年であり、結果的には餓死者の増大など悲惨な結果をもたらすことになるものの、社会主義に期待するマゼレールにとっては感慨深い旅となったようだ。その後も数々の賞を受け、名声が高まる。80歳に近づいた1968年、ポーリーヌを亡くす。翌年、画家で版画家のロール・マルクレと再婚。80歳を記念して、生地

ランケンベルヘ市はマゼレールを名誉市民に任命。1972年1月3日、82歳のマゼレールはアヴィニョンで亡くなる。葬儀はヘント美術館で行われ、ヘント教区内にあるシント＝アマンツベルフの共同墓地に埋葬された。

以上の伝記は、2022年にカステルマン社から出版されたバンド・デシネ『フランス・マゼレール 芸術家の生涯における25の時期』(絵: Hamid Sulaiman、脚本: Julian Voloj)の内容をまとめ、部分的に補足・省略したものである。2022年は版画家の死後50年に当たるため、ヘント美術館での回顧展も行われた。マゼレールをめぐっては、近年漫画史における重要性が認知されるようになり、2019年のアングレーム国際漫画祭ではマルタン・ド・アルー社が再刊した無声小説『思想』(1920年)が遺産賞部門にノミネートされている。実は筆者も、マゼレールの名を初めて教えられたのは漫画史研究者からであった。

その後、マゼレールという名を忘れかけていた頃、切り絵作家の滝平次郎(1921-2009年)が発行していた『日本版画新聞』を見る機会があり、マゼレールが大きく紹介されていることに驚いた。1952年のその記事を出発点として見えてきたのは、戦後まもない時期から日本の評論家たちがぼつりぼつりとマゼレールを話題にし始めたということ。また、その裏を返すように、戦前の、弾圧が激化する以前の日本では、とりわけプロレタリア運動に関わっていた知識人の間でマゼレールの作品が知られていたということも。同時代ヨーロッパの版画家として、ドイツのケーテ・コルヴィッツについては戦前も戦後もしばしば紹介されてきたのに対し、同じくらいインパクトを持っていた可能性のあるマゼレールについては十分に語られてきていないのである。滝平が戦後にマゼレールを取り上げたのも、戦前の日本に定着したマゼレールの認知を引き継ぐというよりは、むしろ魯迅の積極的な紹介によって中国の木版画運動の中に根を下ろしたマゼレールを新たに受容した、という側面の方が強いようだ。

日本でまれに紹介される機会があっても、「フラン・マズレール」であったり「フランツ・マズレール」であったりするため人物像が定まらない(**)。確かにカナ表記が難しい音であり、加えてマゼレール自身、正確な発音などというものに頓着しなかったの

ではないかと思われる。幼い頃に身につけたオランダ語とフランス語だけでなく、長じてからはドイツ語や英語でも意思疎通したであろう国際人にとって、カナ表記に苦しむ私たちの苦悩は理解を超えるものであるかもしれない。マゼレールに限らず、どう呼ばれても構わないという度量の広さは、ベルギーに暮らす多くの人が身につけているものだろうか。ただ、マゼレールに関してはその作品や参考文献に触れる限り、いかなる曖昧さをも受け容れる「巨人」であった。日本語での多様な表記もきっと歓迎してくれるに違いない。その魅力的な人柄に惹かれてか、

日本からは少なくとも戦前に片山敏彦が、戦後に加藤周一と山口俊章が本人に会いに行っている。これほど世界中で愛された版画家を、忘れてはならない。

(*) 筆者が忘れていた挿絵は以下の表紙を飾っている。ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ物語』宮本正清[翻案]、宮本エイ子[補訂]、水声社、2023年。
(**) 本稿での表記は、オランダ語に詳しい鈴木義孝さんからの助言を踏まえたものであり、且つ須山計一や海野弘らによる表記と同一である。

「黒い悪魔」：ベルギーのもうひとつのデビルズ

石部尚登

ワールドラグビー理事会の決定は、オーストラリアで開催される次回のワールドカップで黒い悪魔に有利に働くかもしれない。

DH Les Sports+ 2023年10月24日付

今夏、ラグビーユニオン(15人制ラグビー、rugby à XV / rugby union)の第10回ワールドカップが開催された。残暑というよりはまだ真夏の暑さが続いていた9月8日、サン＝ドゥニのスタッド・ドゥ・フランスでの開幕戦では、開催国フランスのレ・ブルーが優勝候補のオールブラックス(ニュージーランド代表)を下して素晴らしいスタートを切った。一月半に及んだ大会は、10月28日、1点差の手に汗握る試合で、南アフリカ共和国のスプリングボックスが2大会連続4度目の優勝を飾って幕を閉じた。決勝戦の頃にはすでに季節は晩秋を迎えていた。

その決勝戦の4日前、大会を主催する国際競技連盟ワールドラグビーの理事会が次大会での開催方式の変更を発表している。2027年にオーストラリアで開催される第11回ワールドカップでは参加国が4増え、24カ国で熱戦が繰り上げられることになる。この参加枠拡大の決定を受けてベルギーのスポーツ紙が報じたのが先に挙げた一節である。

サッカーの世界カップでは、2018年ロシア大会、2022年カタール大会と、サッカー・ベルギー代

表の「赤い悪魔(Diables Rouges / Rode Duivels)」は優勝候補として世界中の注目を集めた——残念ながら結果を残すことはできなかったが。対照的に、ラグビー界におけるベルギー代表「黒い悪魔(Diables Noirs / Zwarte Duivels)」の存在感はごく薄い。今回のワールドカップにも出場しておらず、これまでも出場経験がない。

ラグビー界には各国(地域)の歴史や伝統、格式に基づいた「ティア(tier)」という階層構造が存在する。実力も含め、伝統国と非伝統国の格差は依然としておおきい。ヨーロッパの国際大会をみても、ワールドラグビー主催の「シックス・ネーションズ(Tournoi des Six Nations / Zeslandentoernooi)」とラグビーヨーロッパ主催の「ヨーロッパ国際選手権(Championnat international d'Europe / Europe International Championships)」がそれぞれ別に存在する。前者は古豪、強豪としてのティア1の伝統国(地域)——イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、フランス、イタリア——による6カ国(地域)対抗戦、それ以外のティア2、ティア3の国々は後者に参加する。両者のあいだには昇格、降格といった参加国の入れ替え制度は設けられていない。

なお、ヨーロッパ国際選手権は「チャンピオンシップ(8カ国)」「トロフィー(6カ国)」「コンファレンス」「デヴェロップメント」の4つのカテゴリで構成

される。ベルギー代表「黒い悪魔」が参加するのは、伝統国 6 カ国(地域)に次ぐという意味で「シックス・ネーションズ B」とも称される最上位の「チャンピオンシップ」のカテゴリである。今年度は、ジョージア、ポルトガル、ルーマニア、スペイン、オランダ、ドイツ、ベルギー、ポーランドが年間タイトルをかけて争う。

さて、11月20日の時点でワールドラグビー公表の世界ランキングでベルギーは26位。次回ワールドカップの参加国は24カ国。今大会の成績に基づき日本を含む12カ国が次大会へのシード出場が決定しており、残りの出場枠は12。予選のレギュレーションは未定だが、これまで同様、各地区予選と最終プレーオフで出場権が争われるものと予想される。ヨーロッパ地区予選はこれまでヨーロッパ国際選手

権の「チャンピオンシップ」が当てられてきた。

「黒い悪魔」のワールドカップ初出場の夢はたしかに広がった。ただし、そのためには来シーズン以降も降格せずに「チャンピオンシップ」を戦い続け、かつ上位の成績を残す必要がある。先のスポーツ紙も書いている。ベルギー・ラグビーが新たな一頁を開くためには、「ポルトガル、ルーマニア、スペインといった国々との実力差を縮めなければならない」。

まずは2024年の「チャンピオンシップ」。ワールドカップ初出場への道は以下の日程で開催される予選プールからはじまる。

- 2024年2月3日(土) ベルギー v. ポルトガル
- 2024年2月10日(土) ルーマニア v. ベルギー
- 2024年2月17日(土) ベルギー v. ポーランド

(jp)	(en)	(fr)	(nl)
トライ	try	essai	try
スクラム	scrum	mélée ordonnée	scrum
ラック	ruck	mélée spontanée	ruck
タックル	tackle	plaquage	tackel
モール	maul	maul	maul
コンバージョン	conversion	transformation	conversie
反則	penalty	pénalité	straf
オフサイド	offside	hors-jeu	buitenspel
スローフォワード	forward pass	passe en avant	voorwaartse worp
ノックオン	knock-on	en-avant	knock-on
フリーキック	free kick	coup franc	vrije schop
アドバンテージ	advantage	avantage	voordeel
フォワード (Fw)	forwards	avants	voorwaarts
プロップ (PR)	prop	pilier	prop
フッカー(Ho)	hooker	talonneur	hooker
ロック(Lo) / セカンドロー(SR)	lock / second row	deuxième ligne	lock / tweede rij
フランカー (FL)	flanker	troisième ligne aile	flanker
ナンバー・エイト (No8)	number eight	huit	nummer acht
バックス (BK)	backs	arrières	backs
スクラムハーフ (SH)	scrum-half	demi de mêlée	scrum half
スタンドオフ (So)	stand-off / fly-half	demi d'ouverture	fly-half
ウィング (WTB)	wing	ailier	wing
センター (CTB)	centre	centre	centre
フルバック (FB)	full-back	arrière	full-back



会員の刊行物

わたしを忘れないで

アリックス・ガラン 著、吹田映子 訳

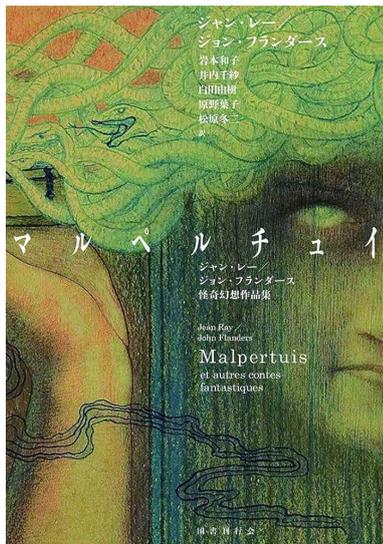
太郎次郎社エディタス、2023年3月刊

定価 2,000円＋税

ISBN 978-4-8118-0858-1

著者のデビュー作にして数々の賞を受賞した、フルカラーのグラフィックノベル。認知症の祖母を施設から連れだしたクレマンは、ある場所をめざして旅に出る。愛おしい記憶、願望と喪失、性、老い、母と娘……。疾走の果てに探しあてたものは——。鮮烈なロードムービーのような一作。著者のガランは1997年ナミュール生まれの漫画家・脚本家。リエージュの聖ルカ芸術高等学校にてバンド・デシネを学ぶ。ブリュッセル在住。





マルペルチュイ——ジャン・レー／ジョン・フランダース怪奇幻想作品集
ジャン・レー／ジョン・フランダース著、岩本和子・井内千紗・白田由樹・
原野葉子・松原冬二 訳

国書刊行会、2021年7月刊

定価 4,600円＋税、ISBN 978-4-336-07142-2

現代ゴシック・ファンタジーの最高傑作『マルペルチュイ』待望の新訳に加えて、ほとんどの収録作が初訳となる、幻の本邦初紹介短篇集2冊、枠物語的怪奇譚集『恐怖の輪』とJ・フランダース名義の幻想SF小説集『四次元』を収録。

飽くなき生への歓喜と病的でグロテスクな想像力を混淆させ、幻怪で濃密な文体によって独自の世界を創造した、作者絶頂期の精華を集大成。

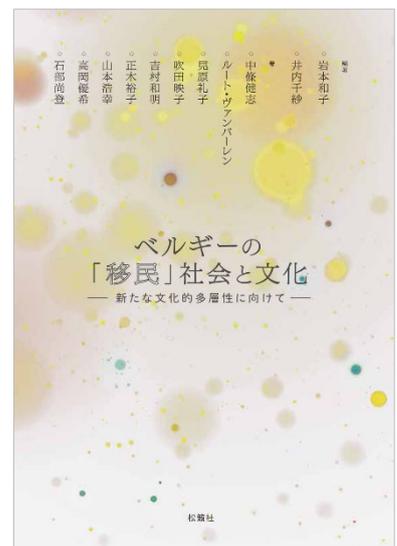
ベルギーの「移民」社会と文化ベルギー——新たな文化的多層性に向けて

岩本和子・井内千紗 編、中條健志・ルート・ヴァンバーレン・見原礼子・
吹田映子・吉村和明・正木裕子・山本浩幸・高岡優希・石部尚登 著

松籟社、2021年2月刊

定価 2,800円＋税、ISBN 978-4-87984-405-7

世界的に「移民」の現状や背景への関心が高まっている。そこではともすれば「移民〈問題〉」だけが注目されがちで、「移民」が文化的多層性の醸成や芸術活動の活性化に寄与する可能性は十分な検討がなされていない。本書は、「移民」社会ベルギーを検討対象とし、「移民」をとりまく文化・芸術面での具体的な制度や方策、個々の芸術家や作品を取り上げ、「移民」の創造的側面を考察する。



時間への^{チェック}王手

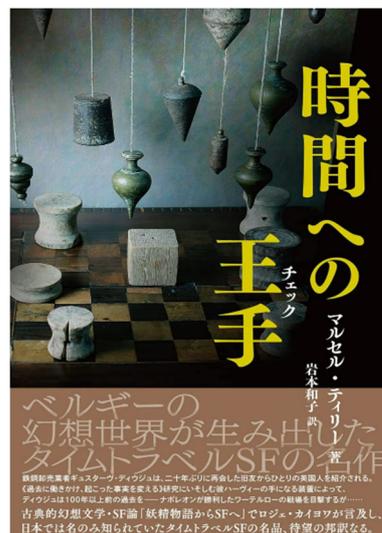
マルセル・ティリー 著、岩本和子 訳

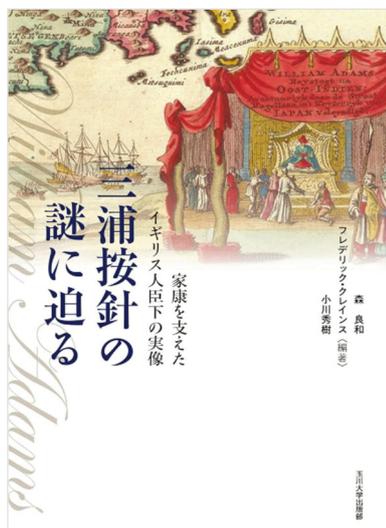
松籟社、2023年6月刊

定価 1,980円＋税

ISBN 978-4879844392

ベルギーの幻想世界が生み出したタイムトラベル SF。《過去に働きかけ、起こった事実を変える》研究にいそしむイギリス人ハーヴィーの手になる装置によって、主人公ディオジュは100年以上前の過去を——ナポレオンが「勝利」したワーテルローの戦場を目撃するが…… 古典的幻想文学・SF論「妖精物語からSFへ」でロジェ・カイヨワが言及し、日本では名のみ知られていたタイムトラベル SFの名品。





三浦按針の謎に迫る——家康を支えたイギリス人臣下の実像

森良和・フレデリック・クレインス・小川秀樹 編

玉川大学出版部、2022年7月刊

定価 2,600円＋税

ISBN 978-4472303142

1600年にオランダ船で来航したイギリス人・三浦按針は徳川家康の寵を受け外交顧問として活躍し、帰国することなく平戸で没した。日本近世史上、例外的なグローバル時代であった江戸初期に様々な役割を果たした按針の実像を、オランダで発見された新史料、伝按針墓の遺骨の科学分析等の近年の知見をふまえて明らかにする。

右翼ポピュリズムのディスコース【第2版】——恐怖をあおる政治を暴く

ルート・ヴォダック 著、石部尚登 訳

明石書店、2023年1月刊

定価 4,500円＋税

ISBN 978-4750355153

ナショナリズム、外国人排斥、人種差別、性差別、反ユダヤ主義、イスラム嫌悪など、極右ポピュリストが煽動する政治的言説やレトリックを体系的かつ批判的に分析することで、右翼勢力が台頭するメカニズムを明らかにし、それに対して何ができるかを問いかける。



ベルギー研究会への入会について

ベルギー研究会に入会をご希望の方は、以下の URL から入会申し込みをお願いいたします。フォームを受信し入力内容を確認次第、担当者よりメールでご連絡いたします。

<https://forms.gle/ow5W6aCBsn1HVbzQA>

問い合わせ先 井内千紗 (chisa.inouchi@gmail.com)



ベルギー研究会会報

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies

第 8 号

発行 2023 年 11 月

編集 石部尚登

事務局 神戸大学大学院国際文化科学研究科岩本研究室

サイト <http://www40.atwiki.jp/kbek/>



ベルギー研究会

Japanse vereniging voor de studie van België
Association japonaise d'études belges
Japanische Vereinigung für Belgische Studien

Japanse vereniging voor de studie van Belg

Association
Belgische
Studien
für Belgien
Association
Belgische
Studien